## はじめに

本学では、財団法人大学基準協会による認証評価を２００８年度に受け、同協会の大学基準に適合していると認定された。同協会による評価結果や『自己点検・評価報告書』をもとに大学の課題を事業計画などに盛り込み、毎年その進捗状況を把握し評価、改善を図ることで大学におけるＰＤＣＡサイクルを稼動させている。また、第三者評価後３年を周期として大学基準協会の点検・評価項目に沿って点検・評価を行うこととし、自己点検委員会による点検・評価結果をもとに自己評価委員会でさらに審議を重ね点検・評価活動を行っている。また、より実質的な点検・評価を実施することを目的に新たに自己点検委員会の下に５つの部会を設置し、専攻・領域の現状、課題等を把握できる体制を整備した。

今回の報告書は２００８年度の第三者評価から３年後の点検・評価活動の結果であり、大学基準協会の１０の点検・評価項目のうち、「Ⅳ．教育内容・方法・成果」「Ⅴ．学生の受け入れ」について重点的にとりあげ点検・評価の結果をまとめたものである。この２項目を今回点検・評価したのは、２０１０年４月に教育組織を改組し、それに伴う年次進行中の教育のあり方を旧教育組織の教育をも参考としつつ検証すること、さらに「何を教えるか」から「何ができるようになったか」を問う学習成果を重視した教育の質保証の枠組みの構築における課題を明らかにする必要性が高かったからである。また、「Ⅴ．学生の受け入れ」については、教育組織の改組に伴うおもに入学生の動向を検証するためである。

今回の改組は、芸術学部に設置していた次の７学科２専攻を発展的に整理・統合し、芸術学教育の学際化や総合化の傾向へ対応するとともに、教育組織の柔構造化による特色ある教育に取組むことにより学部教育の多様な展開を図るため、３学科１２専攻（※）を設置した。

２００９年度までの芸術学部

| | |
|---|---|
| 絵画学科 | 洋画専攻 |
| | 日本画専攻 |
| 工芸学科 | |
| 立体アート学科 | |
| デザイン学科 | |
| メディアアート学科 | |
| ファッション造形学科 | |
| 芸術学科 | |

２０１０年度からの芸術学部

| | |
|---|---|
| 絵画学科 | 洋画専攻 |
| | 日本画専攻 |
| | 立体アート専攻 |
| | 芸術表象専攻 |
| | 美術教育専攻（※） |
| デザイン・工芸学科 | ヴィジュアルデザイン専攻 |
| | プロダクトデザイン専攻 |
| | 環境デザイン専攻 |
| | 工芸専攻 |
| アート・デザイン表現学科 | メディア表現領域 |
| | ヒーリング表現領域 |
| | ファッションテキスタイル表現領域 |
| | アートプロデュース表現領域 |

※　２０１２年４月に「美術教育専攻」を開設予定。３学科１３専攻となる。２０１１年度に策定した「美術教育専攻」の教育内容等について、本報告書に一部掲載している。

なお、本報告書の「Ⅰ．教育内容・方法・成果」のうち、「教育内容・方法」と「Ⅱ．学生の受け入れ」は新教育組織、「成果」は旧教育組織での点検・評価としている。

大学院美術研究科の教育組織については、次のとおりである。

修士課程

| 専攻 | 研究領域 |
|---|---|
| 美術 | 洋画、日本画、版画、工芸（染・織・陶・ガラス・刺繍）、立体芸術 |
| デザイン | ヒーリング造形、メディアアート造形、ファッション造形、視覚造形、環境造形 |
| 芸術文化 | 色彩学、美術史、芸術表象、美術教育 |

博士後期課程

| 専攻 | 研究領域 | 研究分野 |
|---|---|---|
| 美術 | 美術 | 洋画、日本画、版画、工芸（染・織・陶・ガラス・刺繍）、立体芸術 |
| | デザイン | ヒーリング造形、視覚造形、環境造形 |
| | 芸術文化 | 色彩学、美術史 |

# Ⅰ．教育内容・方法・成果

## 教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針

１．現状の説明

（１）教育目標に基づき学位授与方針を明示しているか。

〇学士課程・修士課程・博士課程の教育目標の明示

〇教育目標と学位授与方針との整合性

（２）教育目標に基づき教育課程の編成・実施方針を明示しているか。

〇教育目標・学位授与方針と整合性のある教育課程の編成・実施方針の明示

≪芸術学部≫

建学の精神である「芸術による女性の自立」「女性の社会的地位の向上」「専門の技術家・美術教師の養成」に基づいた芸術学部の目的および理念を踏まえ、美術学科、デザイン・工芸学科、アート・デザイン表現学科の 3 学科と各学科の専攻・領域において、それぞれの教育目標を明確にし、この教育目標をもとに学位授与の方針および教育課程編成・実施の方針を立て、必要な教育体制を整備し体系的に教育課程を編成している。下記のいずれの目的・理念等もホームページで公開している。

目的

女子美術大学学則第１条「芸術に関する最高の理論及び技術を教授研究し、教養高く芸術的創造力の豊かな女性を育成する」

理念

①時代を超えて美を追求する個性豊かな専門家を育成する。

②芸術との感動的出会いの積み重ねを通して、創造の喜びを培い、広い視野と柔軟な思考・行動能力の獲得をはかる。

③社会を読む眼を育て、時代の流れを先取りする芸術的感性を養う。

ディプロマポリシー（学位授与の方針）

・社会人になるにふさわしい考え方を身につけ、幅広い学術視野から芸術を理解できるか。

・広い視野と洞察力によって、時代の流れを見据え、的確な分析と豊かな感性を駆使することによって、独自の発想を生み出すことができるか。

・自らの創作について、他者に伝達するプレゼンテーション能力とコミュニケーション能力を身につけたか。

・社会における芸術の持つ可能性を認識し、活用できるか。

カリキュラムポリシー（教育課程編成・実施の方針）学部共通部分

芸術学部の教育理念を基に、美術・芸術を学ぶ上で、その基盤となる知識と教養、各分野・領域の基礎力・発展力を身につけ、一人ひとりの個性を伸ばせる制作や研究を展開できる教育課程とする。

＜学部共通科目Ａ群＞　知性と感性を高める科目群

人間と文化、社会のしくみ、科学と自然について幅広く学び、知性と感性を高める科目で構成する。

＜学部共通科目Ｂ群＞　コミュニケーション能力を高める科目群

基礎的、実用的、教養的な、多様な外国語、コンピュータ運用能力、異文化理解、コミュニケーション論の習得を介して、美大生にとって今日社会的に必要とされているコミュニケーション能力を高める科目で構成する。

＜学部共通科目Ｃ群＞　こころと身体の健康を高める科目群

運動を通して基礎体力を育み、身体の機能やこころと身体の関連性を学び、生涯を通じて健やかな生活を送るための健康管理能力を高める科目で構成する。

＜学部共通科目Ｄ群＞　文化芸術の科目群

美学・美術史、色彩や素材、図学など、それぞれが専攻する専門分野で応用可能な基礎的知識と能力を習得する科目で構成する。

＜学部共通科目Ｅ群＞　自己を見つめ社会への視野を開く科目群

社会の中での女性のあり方、異文化の中で芸術を表現する国際的感覚、自分の未来像（キャリア）をデザインする能力を習得する科目で構成する。

**＜美術学科＞**

**目的**

美術学科は、過去、現在、未来にわたる、広範な芸術的制作、芸術的理論の探求に基づき、芸術表現およびその研究を練磨することを教育目標としている。平面表現、立体表現の制作技術の鍛錬、作品コンセプトの熟成、芸術理論による表象的意味の理解を通して、社会に対する深い洞察に基づいた創造的活動を持続的に行える人材の養成を目的としている。

**教育目標**

美術学科では大学での4年間を通し、個人の発想を独自性のある表現の域にまで高め、主体的に美術に取り組むことを目指す。

洋画専攻、日本画専攻、立体アート専攻、芸術表象専攻の各専攻で制作技術の鍛錬、作品コンセプトの熟成、表象的意味の理解につとめながら、専門の周辺領域の技術と理論を横断的に学び、美術に関する幅広い認識をもつことで、美術活動を持続的に行うことのできる人材を育成する。また、各自の志向する美術表現が社会で展開されている現状の安易な模倣に終始せず、個人の感性や考えに基づく実感の伴う新たな表現を追及するために、実技や理論研究による実践的経験にもとづく自信、知識を自己の表現と結びつける洞察力、客観的な視野で美術活動全体から専門領域を認識する論理性、それらを基にして自分の目指す表現を確立する。

**［美術学科　洋画専攻］**

**教育目標**

平面絵画を中心に、油彩画、版画、ミクストメディア、映像表現、インスタレーションなど幅広い表現を学ぶことができる。

美術活動全体から専門領域を認識するために、美術全般の基礎的技術や素材、さらに実践に即した美術理論を横断的に学び、美術に対する視野を広げ、個人の発想による制作に社会

性を見い出せるようにする。

平面絵画を中心に、油彩画、版画、ミクストメディア、映像表現、インスタレーションなど幅広い表現を学ぶ。

**ディプロマポリシー**

・洋画・版画の今日的な存在意義を再確認しつつ、現代社会の関係を積極的に反映する表現を身につけているか。

・感性を主体としつつも、広い視野と洞察力によって時代を論理的に分析し、より柔軟な発想と創造性を身につけたか。

・芸術活動をもって社会に貢献するために、自らの制作と社会との関係性を考察・模索していたか。

**カリキュラムポリシー**

洋画専攻では、「個性の尊重」「オリジナリティの追究」「制作におけるプロセスの重視」を教育方針とし、現代社会に対応した多様な美術表現の知識と技術を兼ね備え、芸術活動をもって社会活動・創造活動のできる人材育成を目的として、カリキュラムを編成する。

・１・２年次は、絵画における絵画表現を「素材」「テーマ」「手法」の観点から作品制作に取り組み、基礎的知識と技術を学ぶ。また、ファインアートの歴史と現代社会の関わりを幅広く理解し、専門的知識と技術を学ぶ基礎を築く。また、学科内他専攻の課題を体験し、他ジャンルの芸術の表現方法や知識に触れ、感性を養う。２年次では絵画コース、版画コースに分かれ、専門基礎に取り組み、表現と専門性を探求し学ぶ。

・３・４年次は、表現の展開と専門性の探究を通して、各自のテーマと表現方法の確立を目標とする。

・３年次では専門的知識と技術を学びながら、絵画コースでは、実践的社会活動としての美術を探究し、コース別での作品展示やワークショップなどを通して、ファイル制作技術、プレゼンテーション能力と作品鑑賞能力を高めていく。版画コースでは、４版種から各自の表現に適した版種を選択し、絵画的発想と版を作る技術との融合を図り、資質にあった方向を確立する。

・４年次は、専門的知識と技術を習熟し、習得した幅広い教養と知識、技術の総まとめとして、各自のテーマと表現方法で卒業制作作品を制作し、展示発表する。

**［美術学科　日本画専攻］**

**教育目標**

日本画は長い伝統のもとに育ち今日に至った。日本画専攻は、その精神・技法を土台に、現代、そしてこれからの日本画の創造、発展に向かい、各々の感性、および、それに沿った表現力を高め、個々の創造の喜びを確実なものとし、豊かな人間性を育むことを目的とする。全て競争になりつつある現代において、本来、創造の喜びとは競争より生まれてくるものではなく、個々の研鑽により、自ずと湧きでるものであり、のびのびとした個性ある表現力の発展は、真の創造の喜びを体得することから始まると考える。その為に実技の時間を多くする一方、精神的な“ゆとり”に配慮し、カリキュラムを編成している。

ディプロマポリシー

・多様化した現代の日本画の可能性を探り、主体的に積極的に創作活動を行い、自己の絵画（日本画）を探求しているか。

・日本画の長い伝統を踏まえ、伝統的画材の知識や技法を土台に幅広い表現力を習得したか。

・創作活動で得た考え方・方法・作品を、広く社会に伝えるために、作品展示・発表ができたか。

カリキュラムポリシー

日本画専攻では、日本画制作を軸に、日本画の材料・素材研究や古典絵画の研究を連動させ、幅広い視点から日本画を総合的に学び、日本画の伝統をふまえて、個々の豊かな資質・若い感性を活かした次代の新しい日本画の創造に主体的に取り組める人材育成を目的として、カリキュラムを編成する。

・１・２年次では、日本画制作を通して、伝統的画材や技法の知識などの基礎力を充実させ、作品サイズを次第に大きくしながら、柔軟な思考と創造力を培う。また、学科内他専攻の課題を体験し、他ジャンルの芸術の表現方法や知識に触れ、感性を養う。

・３年次では自己の表現の追求、より自由で個性的な創造的表現へ発展させ、古典研究では、精神・古典技法についてより深く学び、日本画制作の幅を広げる。

・４年次では、各自のテーマを探求し、習得した技術・技法をもとに、集大成として卒業作品を制作する。作品発表を通してプレゼンテーション力を高め、社会に発信していく力を養う。

［美術学科　立体アート専攻］

教育目標

立体アート専攻では彫刻という枠を超え、従来の素材にとらわれる事なく柔軟かつ軽やかで、多様な素材を含めた造形の可能性を追求する。

芸術の本質と普遍性を探り、個々の感性を磨き、自由で豊かな発想による表現活動をする人を育成する。

複数の素材や様式の融合等による新感覚のアートとしての可能性と、独自の表現の探究による独創性にあふれる造形表現を目指す。

ディプロマポリシー

・立体造形に関する専門的な知識を広げ、柔軟な思考による創造力を持ち、独自の発想を具現化できたか。

・粘土・紙・木・石・金属等さまざまな素材の特性を理解し、表現技術を習得したか。

カリキュラムポリシー

立体アート専攻では、芸術の本質を見据え、彫刻という枠と従来の素材・様式などに捉われない独創的な造形表現を追求できるカリキュラムを編成し、立体造形に関する専門的な知識や高度な技術の上に、豊かな感性と深い洞察力を有する人材を育成する。

・１・２年次は立体造形で必要となる専門的な知識・技術における基礎的な理解を深める。また、学科内他専攻の課題を体験し、他ジャンルの芸術の表現方法や知識に触れ、

感性を養う。

・３年次からは粘土・紙・木・石・金属等の中から各自が志望する素材を基に、専門性を高め、自己の表現を模索する。

・４年次はそれまでに習得した専門知識と技術をもって独自の造形性を探求し、集大成としての卒業作品を制作する。

［美術学科　芸術表象専攻］

教育目標

芸術表象専攻は、理論と実践の両面における探求を目標とするこれまでにない専攻である。芸術理論や美術史などを学びながら、先端的な現代アートの制作、アート・プロジェクトなどを実践する。

理論としては、美学、美術史にはじまり、現代思想、社会学、カルチュラル・スタディーズなど、幅広い視野で学ぶ。実践としては、作品制作、アート・プロジェクトやワークショップの企画・運営などを行う。

本専攻において最も重要な要素となるのは、《芸術について考察する》という姿勢である。表象されたものを手掛かりとして、自らの思考を練り上げ、討議を重ね、自分自身で実践しながら、社会に発信していく力を育む。

ディプロマポリシー

・グループや個人での活動において、自ら主体的に考えて取り組む、他の人と意見を交わす、それらの経験に基づいて自己の表現活動を探究することができるか。

・かたちに捉われない表現に挑戦し、新しい発想を生み出す視野を持つことができたか。

・創作活動や執筆活動を通して身につけた考え方を、社会的な実践の場に活かしていく方法を習得したか。

カリキュラムポリシー

芸術表象専攻では、芸術について理論と実践の両面における探究を目標とし、独創的でかたちに捉われない発想の表現活動を展開するカリキュラムを編成し、芸術に関する専門的な知識や技術を備え、幅広い視野を持って活動できる人材を育成する。

・１・２年次は、芸術表象が対象とする、アートやそれにかかわる諸ジャンルの基礎的な捉えかた、口述や記述のメソッド、グループワーク、コンセプトメイキングなどを実践的に身につける。 また、学科内他専攻の課題を体験し、芸術の表現方法・知識に触れ、感性を養う。

・２年次後期から、美術史系のゼミと、芸術理論系（現代アートを含む）のゼミに属し、表現する方法を考えながら、専門性を高めていく。

・４年次では、これまで培った経験から、自己の表現活動を卒業制作または論文の形にまとめ上げる。

［美術学科　美術教育専攻］

教育目標

美術科の教員あるいは美術に関する社会教育の専門家として社会に広く貢献できる人材を

育成するために、絵画、彫刻、デザイン、工芸に関する幅広い知識と表現の方法、美術史・美術理論に関する全般的な知識、および美術教育に関する基礎的・実践的な知識と技能を学ぶ。

1 年次から 3 年次の前半にかけて、絵画、彫刻、デザイン、工芸のそれぞれの領域における作品制作に取り組み、基礎的な知識と技術・手法を幅広く学ぶ。

1 年次、2 年次の主な実技の授業は「デッサン」「造形表現基礎 A」「造形表現基礎 B」の 3 つから構成される。「デッサン」はデッサンの基礎から難しいものまで段階的に学ぶ。「造形表現基礎 A」は美術教育専攻の基幹となる科目で、絵画、立体表現の基本を学ぶ。「造形表現基礎 B」は美術学科内の他の専攻およびデザイン・工芸学科において、絵画、彫刻、デザイン、工芸に関する幅広い表現の方法を体験する。

また、美術学科の共通科目として、西洋美術史、日本美術史、図学、絵画・立体表現の基礎実技、技法・素材に関わる演習などを学ぶ。

2 年次、3 年次からは実技の授業に加えて、「美術教育演習」というゼミ形式の授業において美術教育・美術理論について理解を深め、美術教育に関する専門性を高めていく。美術教育に関する専門科目としては、「美術教育演習」のほかにも「美術教育論」「美術科教育内容指導論」「アート・エデュケーション演習」などの授業が必修となっている。

また、3 年次から 4 年次にかけての実技の授業は、絵画、立体表現などの中からより専門性の高い領域に分かれて制作を行い、4 年次に自己の表現活動を卒業制作または卒業論文の形にして発表する。

ディプロマポリシー

・絵画、彫刻、工芸、デザインの各分野で、確かな技術を習得できたか。

・主体的・積極的に創作活動を行ったか。また、自己のテーマが確立できたか。

・美術に関する理論や技術を中学生・高校生に伝え、指導するための能力を身につけたか。

カリキュラムポリシー

美術教育専攻では、絵画、彫刻、デザイン、工芸、美術史・美術理論に関する幅広い知識と技術を兼ね備え、美術教育で社会に広く貢献できる人材の養成を目的としてカリキュラムを編成する。

・１年次から３年次の前半にかけて、絵画、彫刻、デザイン、工芸のそれぞれの領域における作品制作に取り組み、基礎的な知識と技術・手法を幅広く学ぶ。その際、自専攻の課題のみならず、学科内他専攻および他学科の課題を体験することで、絵画、彫刻、デザイン、工芸のそれぞれの領域における表現方法や知識に触れ、技術・手法を深める。

・２年次からは、美術教育・美術理論のゼミに所属し、美術教育および美術による社会への貢献について理解を深め、美術教育に関する専門性を高めていく。

・３・４年次では、絵画、彫刻、デザイン、工芸の中から各自が志望する領域について、専門性を高め、自己の表現を模索する。

・４年次では、専門的知識と技術を習熟し、習得した幅広い教養と知識、技術の総まとめとして、自己の表現活動を卒業制作または卒業論文の形にまとめ上げる。

## ＜デザイン・工芸学科＞

### 目的

デザイン・工芸学科は、人と人とのコミュニケーション・人とモノの関わり・人と環境のあるべき姿の考察、及び独創的な創作活動の実践を教育目標としている。幅広い視野・技術・感性を実体験を通して養い、柔軟な思考に基づき時代に即応し活躍できる人材の養成を目的とする。

### 教育目標

デザイン・工芸学科では、人と人とのコミュニケーション・人とモノの関わり・人と環境のあるべき姿の考察、および独創的な創作活動の実践を行う。そして幅広い視野・技術・感性を実体験を通して養い、柔軟な思考に基づき時代に即応し活躍できる人材を養成する。そのために専攻する各デザイン分野と工芸分野に関する基礎的な知識と基本的な技能・技法を習得するとともに、デザインや工芸の基礎となる豊かな感性や創造的な発想力、豊かな表現力の養成、柔軟な着想力、実践的な企画力を身につけることを教育目標としている。

## [デザイン・工芸学科　ヴィジュアルデザイン専攻]

### 教育目標

グラフィックデザイン（新聞広告、雑誌広告、ポスターなど平面的な印刷物）を中心に、タイポグラフィ、写真、イラストレーション、映像や新しいデジタル手法まで、幅広い分野のスキルを学びながら、デジタル環境の変化により多様化する時代の中で、的確で新鮮なヴィジュアルコミュニケーションの可能性を探る。

社会の中でコミュニケーションする上で、「ヴィジュアル」とはとても有効かつ豊かな手段である。ヴィジュアルデザイン専攻では、これらを習得する過程で「考えること」からすべてがスタートする。その上で、平面的なグラフィックデザインを中心に、より精度の高いヴィジュアルデザインの習得を目指す。タイポグラフィ、写真、イラストレーション、映像や新しいデジタル表現まで、各専門表現を追究しながら、自らのクリエイションを模索する。

育成するのは、ヴィジュアルデザインが多様化する現代に対応し、時代の息づかいを敏感に吸収し、自ら参加して時代を切り開くことのできるクリエイター。日常生活や社会の中からテーマを見出し、グラフィックデザイン、広告、パッケージデザイン、エディトリアルデザインをはじめ、TVCM、Webコンテンツ、アニメーション、キャラクターデザインなどを駆使して企画、制作する総合的なアートディレクションを学ぶ。

### ディプロマポリシー

- デザインの基礎・造形理論・美しさとは何かが理解できているか。
- 基礎ができた上で、自分の感性を使って可能性を拡大する能力、自己本位ではなく客観的に見る眼を身につけたか。
- 日常的に社会を幅広く捉え、デザインの力で何ができるかを考える問題解決能力を習得したか。

### カリキュラムポリシー

ヴィジュアルデザイン専攻では、デザインの基礎・造形理論・美しさとは何かを理解し、グラフィックデザインデザインを中心に関連分野の幅広いスキルを習得する過程で、客観

的な視点、デザインの力で何ができるか考える問題解決能力などを向上させるカリキュラムを編成し、社会の変化に対応し、的確で新鮮なヴィジュアルコミュニケーションができる人材を育成する。

・１年次はヴィジュアルデザインの基礎を学ぶ。また、学科内他専攻の基礎を体験することで、幅広い知識・手法を習得し、感性を養い、専門領域での表現に反映できる基礎を築いていく。

・２年次はヴィジュアルデザインに必要なスキルを学び、より専門的な基礎を習得する。

・３年次はこれまでに習得したデザインの基礎知識を応用・展開してオリジナリティのある作品およびヴィジュアルデザインの可能性を追求する。

・４年次は各ゼミに分かれて、各自が専門表現の可能性を追求しながらテーマを設定し、４年間の集大成として卒業制作を制作する。

［デザイン・工芸学科　プロダクトデザイン専攻］

教育目標

プロダクトデザインとは、「ヒト（人）」と「モノ（物）」のと関係において、その背景にある事象「コト（生活・環境）」を考え、「モノ（形態・道具）」を創る、デザインである。その“デザイン”の基本は、手を使ってモノを想い・考え、コトを発想・考察し、またモノを創り、提案する作業である。

現在、私達の社会・生活の中には多くの「モノ」が満ち溢れている。新しく良い「モノ」を創造・提案するためには、「ヒト」の感性や生活や環境を充分観察・考察し、機能（用）と造形（美）の関係や意味を熟慮し、発想・創造していく姿勢が必要とされている。価値観の多様化に伴い“高い感性”が問われる今、女性のきめ細やかな感覚と拘りがデザインに求められる。

本専攻では、学内外での社会的な実体験を通して、プロダクトデザイン本来の意味を理解し、それに不可欠な「考える」発想力、「創る」技術力、そして、それを人に「伝える」表現力を、実技・演習・講義を通して学び、柔軟なデザイン力を身に付け、各自の個性・美意識を高め、個々のデザイン能力の完成を目指す。

ディプロマポリシー

・プロダクトデザインの専門領域としての基本技術やデザイン展開能力を有しているか。

・社会におけるデザイン活動や、集団的な生活にとけ込みコミュニケーションがとれる基礎的な能力を有しているか。

・自らの特性や個性を自覚し、様々なデザインから意識的に探り、創造的な取り組みや制作に結びつけ、それを表現する能力を身につけているか。

カリキュラムポリシー

プロダクトデザイン専攻では、社会において柔軟なデザイン活動ができるよう、学内外での実体験を通して、プロダクトデザイン本来の意味を理解し、専門領域としての基礎技術である「発想力」・「技術力」・「表現力」を習得した上で、各自の個性や美意識を高め、デザイン能力を向上させるカリキュラムを編成する。

・１年次は、「体験からの発見」とし、プロダクトデザインの基礎を学ぶ。また、学科内他

専攻の基礎を体験することで、幅広い知識・手法を習得し、感性を養い、専門領域での表現に反映できる基礎を築いていく。それらを通し、自らの特性や個性、能力を見つめ直す。

・２年次は、「モノとコトを知る」とし、各種の素材を中心にした課題から、モノやコトの本質を探求する。

・３年次は「発想からの創造」とし、様々な製品デザインの実技課題を通し、多様なプロジェクトに対応できるデザイン能力を習得する。

・４年次は「社会性と個のデザイン力の確認」とし、社会に視点を向け、自己の個性やデザイン力を再確認する。卒業制作では４年間の集大成として魅力ある作品制作を行う。

［デザイン・工芸学科　環境デザイン専攻］

教育目標

本専攻は、ボーダレス化の進む現代社会において、国際的な価値観と多様性を持った先端的なクリエーターの育成を目的にしている。そのために幅広いデザイン・工芸領域から基礎知識を習得した上で、環境デザインの専門領域の学習を進めていく。

また本専攻では、美大生としての感性を生かした空間デザイナーを目指す学生のための授業と、一級・二級建築士等の資格などを目指す学生のための授業両方が開設されており、自らの感性と志望にあったカリキュラムを選択・計画し、環境デザインの専門性を深めていく。

夢の実現を目指し、広い視野から物事を探求する力やプレゼンテーション能力を磨くと同時に、企業研修等社会で働くための実践力も身に付けることを目標としている。

ディプロマポリシー

・国際的な視野に立ち、文化と歴史を考慮し、自然と人工環境の上に、美術を基盤としつつ幅広い領域の融合から、「もの・空間・都市」等の環境デザインに関する新しい表現ができたか。

・獲得した知識や技術を活用し、様々な課題にそれらを適用し、継続的に表現する能力と意欲を身につけたか。

カリキュラムポリシー

環境デザイン専攻では、地域社会、あるいは全地球的な環境において、創造的なデザイン活動ができるよう、国際的な視野、異領域理解能力、そしてコミュニケーション能力を養える基礎・専門のカリキュラムを編成し、社会の一員としてデザイン活動できる人材を育成する。

・１年次では、「環境デザインとは何か」「空間をデザインすることとは」を学ぶ。また、学科内他専攻の基礎を体験することで、幅広い知識・手法を習得し、感性を養い、専門領域での表現に反映できる基礎を築いていく。

・２年次では、環境デザインに必要なスケール感覚や素材、技術等の基礎を学びながら、さまざまな幅広い環境デザインの領域があることを学ぶ。そして、さらに深めたい専門領域を選択する。

・３年次では、選択した専門領域を中心に深めていきながら、周辺の領域の知識や応用能力を身につけていく。また、学外発表や研修を通して社会性を身につけていく。

・４年次では、それまでに習得した知識、技術、および感性を基に、より高度で社会性のあ

るテーマを各自設定し、条件を整理・分析の上、幅広い表現のデザイン作品を制作する。

［デザイン・工芸学科　工芸専攻］

教育目標

工芸は、人々の心や生活を豊かにするための造形芸術である。作り手は、技と自らの意思により、素材の特徴を生かしたもの作りが求められる。美術とデザインの両領域にまたがり、その表現や解釈は多様で、将来ますます発展していく可能性を持っている。

工芸専攻では、確かな技術と知識を習得し、伝統工芸から現代アートまで、生活・環境のため時代に即応した工芸作品を創造できる発想力・表現力を身につける。また自らの手で根気よくものを作り上げていくことの大切さを学びながら、豊かな感性を育んでいく。産業デザインと工芸技術の双方を学び、手仕事と機械生産の可能性と限界を見極め、次世代の作家・デザイナーとして、柔軟な思考で新しい創作を開拓できる人材を育成する。

ディプロマポリシー

・染・織・刺繍・陶・ガラスの分野で確かな技術を習得し、専門的知識を生かして、創作活動ができるか。
・それぞれの素材の特色を生かした独自の発想を生み出すことができるか。
・繰り返し作業を行う過程で、忍耐力や継続的に学ぶ力を身につけたか。
・作品を通して社会とのコミュニケーションを取ることができたか。

カリキュラムポリシー

工芸専攻では、伝統工芸から現代アートまで、時代に即した創作への発想力と表現力を身につけるという教育目標をふまえ、その実現のために、専門性を生かして新しい視点で工芸を捉えることができるようにカリキュラムを編成し、専門的な知識や高い技術力の上に、幅広い視野を持った人材を育成する。

・１年次は染・織・刺繍・陶・ガラスの五分野の体験を通して、工芸素材の特性を理解する。また、学科内他専攻の基礎を体験することで、幅広い知識・手法を習得し、感性を養い、専門領域での表現に反映できる基礎を築いていく。
・２年次はテキスタイルコース、陶・ガラスコースに分かれ、専門的な技術・技法を習得し、素材への理解を深め、応用力・表現力を高める。
・３年次からは５つの分野に分かれ、専門性を高め、幅広く深い創作活動を展開していく。
・４年次はそれまでに習得した専門知識と技術を基に、独自の発想により集大成としての卒業作品を制作する。卒業作品は、公の場で発表し、その成果を社会に問う。

＜アート・デザイン表現学科＞

目的

アート・デザイン表現学科は、アートとデザインの領域を横断、融合して、クリエイティブな発想力と独創的な表現力を培うことを教育目標としている。ヒューマニティーの視点からアートとデザインを捉え、時代の変化に柔軟に対応できる深い知識と斬新な感性を持ち、コミュニケーション能力に長け、国際社会の幅広い分野で創造的に活躍できる人材の養成を目的とする。

教育目標

アート・デザイン表現学科では、アートとデザインの領域を横断、融合して、クリエイティブな発想力と独創的な表現力を培うことを教育の目標としている。時代の変化に柔軟に対応できる深い知識と斬新な感性を持ち、コミュニケーション能力に長け、国際社会の幅広い分野で創造的に活躍できる人材を育成する。芸術表現や造形表現に関する基礎的な知識と基本的な技能や技法を習得するとともに、人間生活や人間環境に関する基礎的な知識の理解、創造性や独自性のあるビジュアル表現力、芸術関連分野における人間と社会を結ぶ実践的な企画力や管理・運営能力、共同制作能力を養成する。

［アート・デザイン表現学科　メディア表現領域］

教育目標

メディア表現領域では、時代を敏感に感じ、社会の様々な変化に柔軟に対応でき、創造的で表現力のある人材を育成していく。物語性のあるアニメーション、キャラクターデザイン、ゲームなどのコンテンツ作りや映像制作、スクリーンベースの広告デザイン、アートアニメーション、先端テクノロジーを用いたインタラクティブな作品制作を通して多様なメディア表現力を身につけていく。企業や研究所と連携した現実のプロジェクトでの実践的な経験を通して社会で求められるクリエイティビティを理解し、国際社会の中でグローバルに活躍できるメディアクリエイターとして次世代のアートとデザインをリードできる斬新な発想と感性を持った表現者を養成することを目標としている。

ディプロマポリシー

・メディアを理解した上で、アートやデザイン表現における自己の可能性を追求したか。
・メディア表現における専門知識を取得し、創作活動に活用できるか。
・時代や社会の様々な状況に迅速で柔軟に対応できるクリエイティブな能力を身につけたか。

カリキュラムポリシー

メディア表現領域では、人間の五感を理解し、人間生活の原点を考え、グローバルに変わり続けるメディア環境の中で適切な情報・表現を選び使う能力を養えるカリキュラムを編成し、様々な表現への挑戦と時代や社会の状況に対応できるクリエイティブな人材を育成する。

・１年次は、アート・デザイン表現学科共通の基礎実技として、デザイン、絵画、工芸、立体の表現を学ぶ。さらにコミュニケーションデザイン、実写を中心とした映像、スケール感を理解する空間などメディア表現の基礎を習得する。
・２年次は、ストーリーを重視したアニメーション、サウンドデザイン、キャラクターデザイン、Ｗｅｂなどの広告デザイン、インタラクティブ表現など多様なメディア表現を理解し身につける。
・３年次は、各自の将来を展望し、メディアデザイン、メディアアート表現を深く追究する。また、実社会とのプロジェクトを通してクリエイティブな提案を行うことで、コラボレーション手法を身につけ、コミュニケーション能力を高める。
・４年次は、発想を重視したメディアデザインの企画や表現、独創的なメディアアート作品

制作など各自のオリジナル表現を追究する。ゼミに分かれて、各自が設定したテーマに最適な表現手法を選択・融合して卒業制作を行う。

［アート・デザイン表現学科　ヒーリング表現領域］

**教育目標**

「現代社会が何故、ヒーリングを求めているのか」、「現代人にとってヒーリングとは何か」ということを、アートとデザインそれぞれの視点で捉え、実技による創作と理論の両面から探求していく。

今、私たちの生活の中で「癒し」という言葉が頻繁に使われている。それは見方を変えれば、ストレスが溜まりやすい社会状況が、深刻化している表れであるといえるでしょう。
心地よい空間、潤いのある空間で生活を営むこと、リラックスできる環境をつくることは、私たちの生活において精神の安らぎを得るために不可欠な要素であり、そこにはアートやデザインの存在が大切な役割を果たしていると考える。

ヒーリング表現領域では、現代のストレス社会で求められている「ヒーリング」をテーマに、キャラクターデザイン、絵本創作、絵画、壁画、コンピュータグラフィック、ぬいぐるみ、玩具・遊具のデザイン、ユニバーサルアートなどの作品制作や空間デザイン、ワークショップ、実践的なプロジェクトの体験を通して、アートとデザインが社会とどの様に関わり、そして役立てることが出来るのかを考える。

また、医療機関、介護福祉施設、そのほかの様々な公共機関、企業などとのコラボレーションにより、共同研究と共同開発も積極的に進めていく。

そしてヒーリングや福祉を目的としながら、各自の得意な表現を活かして質の高い作品づくりが出来る人材と、公共空間でのヒーリング・アート、ヒーリング・デザインのコーディネイトが出来る企画力を持った人材を育成し、社会への進出をはかることを教育目標とする。

**ディプロマポリシー**

・ヒーリングをテーマとしたアートやデザイン表現において、自己のテーマを探求し、自身の可能性を追求したか。
・ヒーリングを目的とした創作と理論を通して、社会の中で新たな提案を行う能力を身につけたか。
・幅広い表現力と表現技術、素材に対する知識を習得し、創作活動に応用展開が出来るか。

**カリキュラムポリシー**

ヒーリング表現領域では、ヒーリングや福祉を目的としながら、専門的な理論、知識と技術、独自の発想力と創造力、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を身につけるカリキュラムを編成し、各自の得意な表現を活かして質の高い作品づくりができる人材と、公共空間でのヒーリング・アート、ヒーリング・デザインのコーディネイトができる企画力を持った人材を育成する。

・１年次では、アート・デザイン表現学科共通の基礎実技として、デザイン、絵画、工芸、立体の表現を学ぶ。さらに平面素材・立体素材の表現、キャラクター表現の基礎を徹底して学び、ワークショップから、コミュニケーション能力と問題解決の手法を習得する。
・２年次は、空間デザイン、コンピュータグラフィック、壁画制作技法、絵本創作の基礎、

装丁技法の実習から創作表現の基本を身につけていくと同時に、ヒーリングについて各自が独自の視点とテーマを持って学習を進める。

・３年次は、学外の様々なプロジェクトに実際に取組むことにより、社会との連携を実践的に学ぶ。グラフィック表現（キャラクターデザイン、絵本創作、壁画制作）と立体表現（形態表現、子供の道具、おもちゃのデザイン、ぬいぐるみ）の実技を選択し、そこから専門性を深めていく。

・４年次は、グラフィック表現と立体・空間表現、ユニバーサルデザイン、ユニバーサルアートの専門実技を各自選択し、プレゼンテーション能力を習得する発表会を重ね、自己の専門性を高め、研究を追求する。ゼミ形式による卒業制作に取組み、４年間の学びの集大成として、独自のテーマに基づく研究成果の発表を行う。

［アート・デザイン表現学科　ファッションテキスタイル表現領域］

教育目標

ファッションテキスタイル表現領域では、社会に求められる衣服と素材、ファッションとテキスタイルの知識や技術を学ぶとともに、女性ならではの視点を生かしたコスチューム、プロダクト、テキスタイルプリント、バッグ、グッズなどの制作を行う。また、食、住、空間、音、ことばと文字、伝統と先端、医療、哲学、心理学、生態学などの、知識と技術、理論と体験の学びを通してファッションテキスタイルのアートとデザインを追究し、独自な視点に立って次世代への教育を目指す。

女子美術大学では1900 年の開校以来一貫して衣服教育を行い、確固とした技術を次世代へと伝えてきた。111 年を迎える今、表現手段や形態は変わっても、社会との繋がりを重視した教育は今も受け継がれている。

女子美術大学ファッションテキスタイル表現領域では、地域社会や美術館、ギャラリー等と連携して行う素材とアート＆デザイン研究として、木綿栽培からアート＆デザインプロダクト制作を行うジョシビヤーンプロジェクト、また、バラなどの染織素材の栽培から作品につなげるミュープロジェクトやアートワークショップを実施している。また、企業と行うデザインプロジェクトを実践し、新しいファッションテキスタイル表現領域の基本を成す活動を行います。さらに、特色ある活動として、社会貢献を目的に、医療機関や教育機関へのユニフォームや国立医療機関に対する災害衣料の提供などを積極的に進める。

ディプロマポリシー

・基礎的な知識や技術を習得し、社会のニーズに対応したクリエイティブな能力を身につけたか。

・アートの思考をデザインで表現するための方法論を習得し、作品制作につなげられたか。

・芸術、文化、教養、医療関連など多様な領域とファッションとの関係について洞察を深め、自身の作品制作や活動を通して、社会に新しい提案を行う能力を身につけたか。

カリキュラムポリシー

ファッションテキスタイル表現領域では、プロフェッショナルな人材の育成を目標として、企画から制作、効果的なプレゼンテーションができる力を養い、女性の感性を生かしたアートとデザインを追求する。また、企業との連携や、人と触れ合うフィールドワーク

などの体験を通して、実社会の中でアートとデザインが果たす役割と、その価値を学ぶカリキュラムを編成する。

・１年次は、アート・デザイン表現学科共通の基礎実技として、デザイン、絵画、工芸、立体の表現を学ぶ。さらに素材基礎演習、造形基礎演習では「食と衣」をテーマに、衣服表現に必要な素材制作や衣服制作の基礎知識を学ぶ。

・２年次は、ファッションテキスタイルとしての専門領域の基礎知識と技術を習得する。「場と衣」「住・空間と衣」をテーマに身体・衣服との関係を追及し作品制作を行う。また、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力を高め、効果的な演出・構成を目指した発表を行う。

・３年次は、ファッション＋テキスタイルの応用の演習および実習を行うことにより、高度な表現技術を習得し、各自のテーマの専門性を深めていく。地域社会、医療関連施設、企業等のコラボレーションやプロジェクトに参加し、社会との実践的な活動を行う。

・４年次は、各自の専門性、可能性を追求した作品制作及び企業や外部とのコラボレーションやプロジェクト、ワークショップの活動に取り組み、４年間の集大成として研究成果の発表を行う。

［アート・デザイン表現学科　アートプロデュース表現領域］

**教育目標**

美術、音楽、映像など、さまざまな領域のアートを世界に発信する技術を学ぶ。

アートプロデュース表現領域は、美術を中心に、音楽、演劇、映像など、「見る」側の立場に立って、さまざまなアートプロデュースの基礎を学ぶ。アーティストが生み出す優れた作品を広く世界に発信し、「人間」の幸福につながる、アートによる「社会貢献」の可能性を、理論と実践を通して追究していく。

アートはアーティストが「作品」を作るだけでは成立しない。なぜなら、それを受け止める「観客」がいて、はじめてそのすばらしさが姿を現わす世界だからである。そして、その「観客」も老若男女、さまざまな背景とそれぞれの人生をもって、そのアーティストの「作品」と出会おうとするのである。アートプロデュース表現領域では、「展覧会」という言葉の意味を、単に「絵を飾る」場所としてではなく、私たちの五感に呼応した総合的な人間の場として捉え、美術を中心に、音楽、演劇、映像といった表現を立体的につなげ、広く社会に開いていく技術を、実践を通して学んでいく。美術作品を見ることも大好きで、同じように音楽を聴くことが大好きな人は、どうしたらその２つの表現を結びつけ、もっと大きな喜びに変えていくことができるのかを考える。子どもが大好きな人なら、子どもたちが楽しくて毎日遊びに行きたくなるような美術館とはどんな美術館なのかを考える。そうした自由な発想を大切にしながら、最終的に総合的なアートイベントを実現させ、アートプロデューサー、キュレーター、ファシリテーターとなる、その基礎を体得することを目標とする。

**ディプロマポリシー**

・美術を中心に、音楽、演劇、映像など、「生きる」ことの肯定につながる、アートプロデュースの可能性について、理解を深めることができたか。

・女性の視点に立って、複雑化する市民社会のニーズに呼応する、アートプロデュースの基

礎を習得することができたか。

・アートプロデュースの実践を通し、国際交流の重要性を理解することができたか。

**カリキュラムポリシー**

アートプロデュース表現領域では、女性の視点に立ち、展覧会を中心に音楽、演劇、映像などに関わる、様々なアートプロデュースの基礎を学び、アートを通して、社会と人間をつなぐことを喜びとする社会貢献について理解を深めるカリキュラムを編成し、複雑化・国際化する社会に対応できるアートプロデューサー、コーディネーター、ファシリテーターを養成する。

・１年次は、アート・デザイン表現学科共通の基礎実技として、デザイン、絵画、工芸、立体の表現を学ぶ。さらにミュージアムスタディ概論とアートプロデュース概論を通して、アートプロデュース表現領域の基礎を学ぶ。

・２年次は、美術を中心に、音楽、演劇、映像に関わる基礎理論と実技を学び、あわせて様々な国の在日大使館とのコラボレーションとして、国際文化交流の演習を行い、国際的な視点に立ったアートプロデュースの基礎を学ぶ。

・３年次は、より専門性を深めながら、美術、音楽、演劇、映像を統合したイベントの企画立案をめざし、社会貢献としてのアートプロデュースを学ぶ。

・４年次は、前期に３年次に企画した総合イベントを広く社会に発表し、後期は卒業研究（制作）をプロデュースし、４年間の集大成を行う。

以上のとおり、芸術学部の目的を達成するため、各専攻・領域の教育目標、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを策定している。

**≪大学院≫**

大学院の目的、理念等は下記の通りである。大学院は、1994 年、学部を基礎とする美術研究科修士課程を開設した。女性のみに制限することなく男女共学とし、意欲のある人材に広く門戸を開いている。

**目的**

女子美術大学大学院学則第 1 条「芸術及びその理論を教授研究し、その深奥をきわめて、文化の進展に寄与することを目的とする」

**＜美術研究科　修士課程＞**

**目的**

修士課程は、広い視野に立って精深な学識と技術を授け、専攻分野における研究能力又は高度の専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養うことを目的とする。このことにより、芸術の新しい動向に対応し得る、確かな原理を体得した専門家、作家、研究者及び教育者を養成する。

**理念**

①「芸術の新しい動向に対応し得る、確かな原理を体得した専門家・作家・研究者の養成」

②「芸術研究の新分野の開拓」

③「新しい視点からの創作研究」

ディプロマポリシー

・芸術に関する深く幅広い学識と技術を有しているか。

・幅広い視野と芸術的発想力を持ち、問題意識を持って課題に対して柔軟・積極的に取り組めるか。

・豊かな表現力を持つとともに知識への深い探究心を備えているか。

・作家、研究者、教育者、企業人等高度な専門家として社会に貢献できるか。

［美術専攻］

･創作研究のテーマが確立しているか。

･創作研究においてテーマに即した構成力、技術･素材の使用方法、表現方法を習得したか。

･段階的思考がテーマに対して積み重ねられ、その思考法を習得したか。

･学内・学外への作品発表に意欲的に取り組んだか。

［デザイン専攻］

･デザイン研究のテーマが確立されているか。

･研究テーマに論理的な分析が行われ、デザイン理論の構築、実技の専門性を深めているか。

･デザインの目的や対象が多様化する現代社会において、独自の視点からデザインを創作しているか。

［芸術文化専攻］

･美術における伝統と創造の価値を統合する理論的な枠組みを構築することができたか。

･多様な今日的視点から美術についての理論的な分析を行うことができたか。

･色彩・美術史・芸術表象・美術教育に関する高度で多元的な研究を行うことができたか。

カリキュラムポリシー

修士課程は芸術の新しい動向に対応し得る、確かな原理を体得した作家・研究者・教育者・高度な専門家を養成することを目的にカリキュラムを編成する。

・専攻・研究領域の枠を超えて、各研究領域の基本となる技法と分析方法、美術・デザインに関する理論に取組むことで、学生各々の研究テーマに自由な発想と分野横断的かつ複合的視野を養う。

・研究課題に応じて他研究領域の実技に取組み、新しい芸術感性と発想力、幅広い視野を培う。

［美術専攻］

美術の新しい動向に対応するとともに、個々の表現を追求しながら、客観的評価を加味する素材や手法の演習を通じて、実証的、分析的、系統的に創作研究するカリキュラムを編成する。

･発想の幅を広げ、伝統的に固定されてきたジャンルの境界を越えた表現の創作研究を可能とする。

･作品制作における十分な理論的補強を行う機会を設け、論理的思考を養成する。

［デザイン専攻］

拡大かつ多様化し続けるデザインに対して、個々の研究テーマを定め、研究テーマの裏付けとなる調査やデータ分析などの論理的な分析を行いながら、表現・手法の専門的技術の追

求と作品制作に取組み、独自の視点の創作表現を探求するカリキュラムを構築する。

・豊かな発想と表現力を育む制作環境と指導体制を整え、作品制作と論理的な研究の両面から、学生の将来的発展の可能性を追求する。

［芸術文化専攻］

美術における伝統と創造の価値を統合する理論的な枠組みを構築し、多様な今日的視点から美術についての理論的な分析による高度で多元的な研究を行うためのカリキュラムを編成する。

・色彩研究領域では、色彩学における理論と方法論と会得し、自らのテーマに沿った研究を構築することが出来るよう指導する。

・美術史研究領域では、隣接領域の研究方法や成果をも柔軟に採り入れながら、美術史における理論と方法論を会得し、自らのテーマに沿った研究を構築することが出来るよう指導する。

・芸術表象研究領域では、理論と実践をふまえて、芸術表象における理論と方法論を会得し、自らのテーマに沿った研究を構築することが出来るよう指導する。

・美術教育研究領域では、隣接諸科学の方法論や研究成果を取り入れながら、美術教育における理論と方法を会得し、自らのテーマに沿った研究を構築することが出来るように指導する。

**＜美術研究科　博士後期課程＞**

目的

博士後期課程は、専攻分野について、研究者として自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力及びその基礎となる豊かな学識を養うことを目的とする。このことにより、幅広くかつ堅実な方法論をもつ造形理論研究者、作品制作と理論との融合による新たな制作者・教育者及び社会において直ちに指導的役割を果たし得る高度な専門知識・技術を持つ人材を養成する。

理念

①「作品制作と理論との融合による新たな制作者・教育者の養成」

②「社会において直ちに指導的役割を果たし得る高度な専門知識・技術をもつ人材の養成

③「幅広くかつ堅実な方法論をもつ造形理論研究者の養成」

ディプロマポリシー

・研究テーマと内容に独創性と社会的意義があり、新たな理論・表現を構築したか。

・研究成果を国内外のコンクールや個展、学会等を通して社会に還元し、高い評価を得たか。

・国際的な視野を立ち、芸術に関する学識や技術を自立して探求し続けられるか。

・作家、研究者、教育者、企業人等、高度な専門家として社会に貢献できるか。

カリキュラムポリシー

博士後期課程は「作品制作と理論との融合による新たな制作者・教育者」「社会において直ちに指導的役割を果たし得る高度な専門知識・技術を持つ人材」「幅広くかつ堅実な造形理論研究者」を養成することを目的としてカリキュラムを編成する。

・　円滑な研究活動を行うため、「造形研究計画演習」において、学生の研究計画の立案に取組み、主任指導教員と理論系教員が関わり指導を行う。「造形理論特別研究」にて、理論

研究の方法論を会得するとともに、「特殊研究」により深く体系的な研究に取り組む。

・ 研究の集大成として、博士論文と修了制作（実技系分野のみ）に取り組む。研究を通して、自立して研究活動を継続展開できる能力を身につける。

「美術研究領域」

・専門的な作品制作と理論を統合した研究を行う。それに伴い、指導的役割を果たし得る情熱を持った制作者・教育者の養成のために洋画・日本画・版画・工芸・立体芸術の研究分野での研究指導を行う。

「デザイン研究領域」

・デザインに対する幅広い視点とより高い専門性を探求しそれらを養う為に、学位を保持する複数分野の教員による指導を行う。

・学生が既存のデザインの研究を踏まえ新しい知見の発見や理論構築を積極的に取り組む指導を行う。

・「人と人のコミュニケーション」「人とモノのインタラクティブ」「人と空間のインタリレーション」などのデザイン分野の専門性と相関性を考慮し、系統だった研究指導を行う。

「芸術文化研究領域」

・従来の堅実な研究方法論を基礎としながら、様々な周辺領域の研究とのコラボレーションが可能な柔軟な思考力を備えた研究者の養成を目指す。

・基礎から応用まで幅広い視点を持ち、高度に専門的な研究の行える人材の育成を目指す。

・長年の研究を継承するとともに新たな研究の視点・方法を採り入れ、厳密な研究姿勢とともに新しい研究の多様性にも対応する指導を行う。

**〇修得すべき学習成果の明示**

学習成果については、芸術学部・大学院ともにディプロマポリシー（学位授与の方針）で明らかにしている。

**〇科目区分、必修・選択、履修年次の指定、卒業所要単位数等の明示**

**≪芸術学部≫**

芸術学部の共通教育部分である学部共通科目の科目区分、必修・選択、履修年次の指定については、『履修の手引』に明示している。

**≪大学院≫**

毎年度発行する『履修の手引』に、科目区分、科目毎に必修・選択、履修年次、卒業所要単位、学位審査要項を示している。

**（３）教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針が、大学構成員（教職員および学生等）に周知され、社会に公表されているか。**

**〇周知方法と有効性**

**〇社会への公表方法**

**≪芸術学部≫≪大学院≫**

建学の精神、教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針は、『大学案内』、ホーム

ページ、『履修の手引』に掲載し、教職員、受験生、在学生、保護者に周知するとともに社会に公表している。

ホームページにおいてほぼすべての情報を掲載しているが、印刷媒体のうち重要なツールである大学案内への情報掲載が不十分である。また、履修の手引きにディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを載せることも検討する。

**（４）教育目標、学位授与方針および教育課程の編成・実施方針の適切性について定期的に検証を行っているか。**

**≪芸術学部≫≪大学院≫**

2010 年 4 月、芸術学部は教育目標を教育課程の改組を行い、実質的な教育体制に合わせて、専攻・領域ごとにディプロマポリシー（学位授与の方針）、カリキュラムポリシー（教育課程の編成・実施方針）を策定した。2013 年に完成年度を迎え、授業科目とシラバスなどが十全な形で整うことになることから、同年に芸術学部と大学院を併せて教務委員会にて検証を行うことを予定している。

**２．点検・評価**

**（１）効果が上がっている事項**

**≪芸術学部≫≪大学院≫**

芸術学部教務委員会、大学院運営委員会でのディプロマポリシー、カリキュラムポリシーの策定、教授会での決定を通して、学習成果や教育課程編成への教職員の意識の共有が図られた。さらに、ホームページでの公表を通して、教育の質保証、教育改革に関する意識が向上した。

**（２）改善すべき事項**

**≪芸術学部≫≪大学院≫**

①教育目標、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー等を点検した結果、改善のため見直しすべき文言があった。

②教育目標、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを踏まえ、これらを受験生に分かりやすい言葉で大学案内等に掲載する必要がある。

**３．将来に向けた発展方策**

**（２）改善すべき事項**

**≪芸術学部≫≪大学院≫**

①教育目標、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシーの更なる周知について、教職員と学生に対する周知方法として、『履修の手引』に掲載するなど改善する。

**≪芸術学部≫**

①芸術学部全体での教育目標、各学科レベルのディプロマポリシー及びカリキュラムポリシーを策定する。

②2012 年度に開設する美術学科美術教育専攻のディプロマポリシー、カリキュラムポリシーを公表する。

**≪大学院≫**

教育目標について大学院運営委員会で見直しを行う。

## 教育課程・教育内容

１．現状の説明

（１）教育課程の編成・実施方針に基づき、授業科目を適切に開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

≪芸術学部≫

**〇必要な授業科目の開設状況**

**〇順次性のある授業科目の体系的配置**

各学科・専攻・領域の教育目標の実現を図るために定めたディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーに基づき、下表のとおり、学部共通科目（教養教育）と学科専門科目（専門教育）を体系的に編成している。3学科とも卒業所要単位は、124単位としている。

学科専門科目（専門教育）は専攻領域独自に専攻する専攻・領域専門科目と、学科内で共通に開設する学科共通科目に分けている。専攻・領域各々が必修科目、選択必修科目、選択科目と卒業所要単位数、学習の順次性を明確にするため履修年次を指定している。

**〇専門教育・教養教育の位置づけ**

学部共通科目（教養教育）は、大学生・社会人として必要となる広い一般常識、コミュニケーション能力、それぞれの専門分野で応用可能な文化・芸術に関する知識と能力等の習得を目的として、知性と感性を高める科目群（A群）、コミュニケーション能力を高める科目群（B群）、こころと身体の健康を高め科目群（C群）、文化・芸術の科目群（D群）、自己を見つめ社会への視野を開く（E群）の5つの科目群から構成している。

学部共通科目（教養教育）の卒業所要単位は、美術学科40単位、デザイン・工芸学科とアート・デザイン表現学科30単位であるが、学習の偏りを避けるため、A群8単位以上、B群4単位以上（うち外国語コミュニケーション科目2単位選択必修）、C群2単位以上、D群12単位以上、E群4単位以上（「基礎学習ゼミ」2単位必修を含む）の各科目群に卒業所要として計28単位を設定し、バランスの良い教養を身につける仕組みを設けている。また、一部の各専攻・領域においては専門教育に必要となる科目を必修、選択必修指定、学科共通科目としている場合もある。

卒業総所要単位124単位のうち、美術学科は学部共通科目（教養教育）32.3%（40単位）、学科専門科目（専門教育）67.7%（84単位）、デザイン・工芸学科、アート・デザイン表現学科は学部共通科目（教養教育）24.2%（30単位）、学科専門科目（専門教育）75.8%（94単位）の割合であり、教養教育と専門教育を両立させながら、専門性を追求する各学科・専攻・領域の教育目標の達成を目指した教育課程を構築している。

**芸術学部　卒業所要単位および科目区分**

| 科目区分 ＼ 学科／専攻・領域 | | 学部共通科目 | | | | | 学科専門科目 | | | | 卒業所要単位 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | A群 知性と感性を高める科目群 | B群 ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ能力を高める科目群 | C群 こころと身体の健康を高める科目群 | D群 文化・芸術の科目群 | E群 自己を見つめ社会への視野を開く科目群 | 学科共通科目 | | 専攻・領域専門科目 | 小計 | |
| | | 6以上 | 4以上 外国語ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ 2単位選択必修含む | 2以上 | 12以上 | 4以上 基礎学習ｾﾞﾐ 2単位必修含む | 必修 必修・選択 | 選択 注1 | | | |
| 美術 | 洋画 | 40 | | | | | 18 | 8 | 58 | 84 | 124 |
| | 日本画 | 40 | | | | | 18 | 10 | 56 | 84 | |
| | 立体ｱｰﾄ | 40 | | | | | 18 | 6 | 60 | 84 | |
| | 芸術表象 | 40 | | | | | 32 | 0注2 | 52 | 84 | |
| デザイン・工芸 | ｳﾞｨｼﾞｭｱﾙﾃﾞｻﾞｲﾝ | 30 | | | | | 10 | 20 | 64 | 94 | |
| | ﾌﾟﾛﾀﾞｸﾄﾃﾞｻﾞｲﾝ | 30 | | | | | 12 | 18 | 64 | 94 | |
| | 環境ﾃﾞｻﾞｲﾝ | 30 | | | | | 12 | 18 | 64 | 94 | |
| | 工芸 | 30 | | | | | 10 | 20 | 64 | 94 | |
| アート・デザイン表現 | ﾒﾃﾞｨｱ表現 | 30 | | | | | 32 | 8 | 54 | 94 | |
| | ﾋｰﾘﾝｸﾞ表現 | 30 | | | | | 32 | 8 | 54 | 94 | |
| | ﾌｧｯｼｮﾝﾃｷｽﾀｲﾙ表現 | 30 | | | | | 30 | 8 | 56 | 94 | |
| | ｱｰﾄﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｽ表現 | 30 | | | | | 28 | 14 | 52 | 94 | |

注1　他学科の「学科共通科目」の一部を履修することができる。修得した単位は、「学科共通科目・選択科目」に含むことを可能とし6単位を上限として卒業所要単位に算入できるものとする。

注2　美術学科芸術表象専攻は、他学科の「学科共通科目」の一部を履修し、修得した単位を「学科共通科目・選択科目」に含むことができるが、卒業所要単位としては算入できない。

**≪大学院≫**

**〇必要な授業科目の開設状況**

**〇順次性のある授業科目の体系的配置**

**〇コースワークとリサーチワークのバランス**

**＜修士課程＞**

修士課程は、基礎となる学部の学科・専攻における教育課程との継続性を踏まえており、教育課程は、4 つの科目群（研究指導科目、共通実技科目、関連演習科目、共通理論科目）によって編成し、理論的および技術的な基礎と幅広い知識の修得に配慮している。履修方法の特徴は、広い視野に立って研究を進められるように、共通実技科目、関連演習科目、共通理論科目の 3 科目群において選択可能な授業科目を多数開設している。

修士課程の修了要件は、必修・選択必修を含めて 32 単位以上修得し、修士論文または修士作品についての審査及び最終試験に合格することと定めている。研究指導科目は専門性に基づく高度な研究能力を開発するリサーチワークとして、修了所要単位数の半分にあたる 16 単位を占めている。関連演習科目、共通理論科目、共通実技科目はコースワークとして 16 単位以上が修了所要単位数となっており、バランス良い教育課程を構築している。

学習の順次性は研究指導科目を 2 年間の研究として年次指定を行っている。その他の科目群は、年次指定の必要性がないため一部の科目を除いて行っていない。

## 修士課程　教育課程

### 修士課程　美術専攻

| 研究領域・ｺｰｽ / 科目 | 洋画・日本画・版画・工芸(刺繍)・立体芸術 | 工芸(染)・工芸(織)・工芸(陶)・工芸(ｶﾞﾗｽ) |
|---|---|---|
| 研究指導科目 | 16　注 1 | 16　注 1 |
| 共通実技科目 | | |
| 関連演習科目 | 4　注 2 } 16 | 6　注 2 } 16 |
| 共通理論科目 | 8 | 8 |
| 合計 | 32 単位 | 32 単位 |

注 1　1 研究領域・ｺｰｽを選択すること。
注 2　各研究領域・ｺｰｽが指定する関連演習科目を履修すること。
・洋画「洋画演習表現技法演習」、「洋画材料・技法演習」
・日本画「日本画表現技法演習」、「日本画材料・技法演習」
・版画「版画表現技法演習」、「版画材料・技法演習」
・工芸（染）
・工芸（織）　} 「染織素材・技法演習」
・工芸（刺繍）「染織品保存修復演習Ⅰ」、「染織品保存修復演習Ⅱ」
・工芸（陶）「陶素材・技法演習」
・工芸（ｶﾞﾗｽ）「ｶﾞﾗｽ表現演習」
・立体芸術「立体芸術表現技法演習」、「立体芸術材料・技法演習」
注 3　修士作品を提出すること。

### 修士課程　デザイン専攻

| 研究領域・ｺｰｽ / 科目 | ﾋｰﾘﾝｸﾞ造形・ﾒﾃﾞｨｱｱｰﾄ造形・視覚造形 | ﾌｧｯｼｮﾝ造形 | 環境造形 |
|---|---|---|---|
| 研究指導科目 | 16　注 1 | 16 | 16 |
| 共通実技科目 | | | |
| 関連演習科目 | 4　注 2 } 16 | 2　注 2 } 16 | 6　注 2 } 16 |
| 共通理論科目 | 8 | 8 | 8 |
| 合計 | 32 単位 | 32 単位 | 32 単位 |

注 1　1 研究領域を選択すること。
注 2　各研究領域が指定する関連演習科目を履修すること。
・ﾋｰﾘﾝｸﾞ造形「ｱｳｪｱﾈｽ演習」、「ﾋｰﾘﾝｸﾞﾃﾞｻﾞｲﾝ演習」
・ﾒﾃﾞｨｱｱｰﾄ造形「ｲﾝﾀﾗｸﾃｨﾌﾞ空間演習」、「情報ﾒﾃﾞｨｱ演習」
・ﾌｧｯｼｮﾝ造形「身体・衣服造形演習」
・視覚造形「画像研究演習」、「ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝﾃﾞｻﾞｲﾝ演習」
・環境造形「ﾃﾞｻﾞｲﾝ素材演習」、「形態研究演習」、「空間構造演習」
注 3　修士論文または修士作品を提出すること。

**修士課程　芸術文化専攻**

| 研究領域・ｺｰｽ<br>科目 | 色彩学 | 美術史・芸術表象 | 美術教育 |
|---|---|---|---|
| 研究指導科目 | 16 | 16　注１ | 16 |
| 共通実技科目 | | | |
| 関連演習科目 | 4　注２ } 16 | 2　注２ } 16 | 4　注２ } 16 |
| 共通理論科目 | 8 | 8　注３ | 8　注３ |
| 合計 | 32 単位 | 32 単位 | 32 単位 |

注１　１研究領域・ｺｰｽを選択すること。
注２　各研究領域が指定する関連演習科目を履修すること。
・色彩学「色彩管理演習」、「色彩実験・調査演習」、「視覚工学演習」または「視覚ﾃﾞｻﾞｲﾝ演習
・美術史 } 「科学調査演習」、「保存修復演習」、「図形分析演習」、「文芸創作演習」の中から２単位
・芸術表象 } 以上修得すること。
・美術教育「美術教育基礎演習」「ﾃﾞｻﾞｲﾝ教育基礎演習」
注３　各研究領域が指定する共通理論科目を履修すること。
・美術史は「日本美術史特講」、「ｱｼﾞｱ美術史特講」、「西洋美術史特講」、「近代日本美術史特講」、「現代芸術思潮特講」、「鑑定分析論」の中から４単位以上修得すること。
・芸術表象は「伝統と創造」、「言語とｱｰﾄ」、「現代文化論」の中から４単位以上修得すること。
・美術教育は「美術教育特講Ａ」「美術教育論特講Ｂ」４単位修得すること。
注４　修士論文を提出すること。

**＜博士後期課程＞**

博士後期課程の教育課程は、4 つのカテゴリー（造形研究計画演習、造形理論特別研究、特殊研究、研究指導）によって構成しており、学生の研究テーマに応じて博士論文作成と修了制作（実技系分野のみ）を行う研究指導を 3 年間のリサーチワークの根幹として 3 年間履修指定している。1 年次に学生自らの研究計画の基本的枠組みを立案する造形研究計画演習、1・2 年次に理論研究の方法論を会得する造形理論特別研究と特定分野についてより深く体系的に研究する特殊研究を履修指定し、順次性を持つ教育課程を構築している。

リサーチワークを中心とした教育課程において、自立した創造性豊かな研究者・制作者・指導的専門家として研究活動を継続展開させていく研究能力を養成している。

博士後期課程の修了要件は、必修および選択必修科目をあわせて 10 単位以上修得し、かつ研究指導を受けた上、博士論文の審査並びに最終試験に合格することと定めている。

**博士後期課程教育課程**

博士後期課程美術専攻

| 授業科目名 | | 授業を行う年次 | 単位数 必修 | 単位数 選択 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| a | 造形研究計画演習 | 1 | 4 | | |
| b | 造形理論特別研究Ⅰ | 1・2 | | 2 | 2 科目 4 単位 選択必修 |
| | 造形理論特別研究Ⅱ | 1・2 | | 2 | |
| | 造形理論特別研究Ⅲ | 1・2 | | 2 | |
| c | 美術特殊研究 | 1・2 | | 2 | 2 単位選択必修 |
| | ﾃﾞｻﾞｲﾝ特殊研究 | 1・2 | | 2 | |
| | 芸術文化特殊研究 | 1・2 | | 2 | |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| d | 美術研究指導 | １～３ | | | |
| | ﾃﾞｻﾞｲﾝ研究指導 | １～３ | | | |
| | 芸術文化研究指導 | １～３ | | | |

**（２）教育課程の編成・実施方針に基づき、各課程に相応しい教育内容を提供しているか。**

**〇学士課程教育に相応しい教育内容の提供**

**〇初年次教育・高大連携に配慮した教育内容**

**≪芸術学部≫**

芸術学部全体、各学科・専攻・領域において定められた教育目標に基づき、カリキュラム・ポリシーが定められており、それに相応しい教育内容を検討し、提供している。学科においては専門教育の基礎を共通科目とし、専攻・領域においては１年次に基礎的内容に取組み、専門的技術・表現の追求を経て、4 年次に各自のテーマに応じた作品制作・理論研究をまとめる教育内容となっている。提供する教育内容の概要は、カリキュラム編成の特徴として学科・専攻・領域別にまとめている。

初年次教育は、大学での学びや生活への円滑な移行と早期から主体的に将来の自分について考え職業観を育み自立を促すため、1 年次から以下の多彩なプログラムを実施している。

・ 学部共通科目　Ｅ群「基礎学習ゼミ」（1 年次前期必修科目）
「女子美の歴史と教育理念」「情報リテラシー」「女性の仕事・キャリアと人間力」「将来の職業生活や進路選択に対する動機付け・方向性」「卒業生による講演会」「読む・聞く・書くの学習法」「マナー基礎講座」「カリキュラム理解」「芸術鑑賞」などを必修の授業で実施している。

・ 学科専門科目　学科・専攻・領域の導入基礎科目
各専攻・領域では授業形態、科目名は様々であるが、1～2 年次において、基礎を重視した授業を行っている。多くの授業が個別指導を行っており、学生の実力に応じた目標・アドバイスを行っている。

・ キャリア形成・就職支援プログラム
学科共通科目　Ｅ群「キャリア形成Ａ～Ｄ」の開設のほか、就職・進路ガイダンス、キャリアデザインセミナー、進路・就職サポートイベント、スキルアップ講座、インターンシップなど本学独自の正課外プログラムを多数実施している。

・ キャンパスライフ支援プログラム
科目の履修方法、図書館利用、海外留学、健康管理、奨学金に関することなど、学生生活全般に関する各種ガイダンスや個別相談などを実施している。

また、オフィスアワー、ティーティングアシスタントの任用などの制度を整え、学生個々に応じた手厚い指導を行っている。

なお、高大連携となる入学前教育については、ＡＯ、公募制推薦、指定校推薦、付属推薦による入学予定者に対し、課題提出または入学までの学習並びに諸準備の説明を行っている。

**＜美術学科＞**

**カリキュラム編成の特徴**

1 年次は、専攻における基礎的な技術と知識の修得、2 年次は専攻での専門（コース）の

基礎および専門技術の修得を中心に、美術の基礎として美術史、美術理論、美術共通実技Ａ・Ｂ、素材・技法の美術共通演習Ａ・Ｂを学ぶ。

美術史は、「日本美術全史」および「西洋美術全史」を必修科目とする。

美術理論は、「芸術表象史（絵画）（立体）（ミクストメディア）」を選択必修科目とする。「技法史」・「パレルゴン概説」・「アート・サイエンス・テクノロジー概説」を選択科目とする。

美術学科基礎技術は、1 年次、「美術共通実技Ａ」として Aa（洋画）・Ab（版画）・Ac（日本画）・Ad（彫塑）、2 年次、「美術共通実技Ｂ」として Ba（洋画）・Bb（絵画−モザイク）・Bc（版画）・Bd（日本画）・Be（彫塑）を（選択）必修科目とする。

平面・立体に関わる素材・技法は、1 年次「美術共通演習Ａ」、2 年次「美術共通演習Ｂ」として Aa・Ba（技法−素描）、Ab・Bb（技法−絵画）、Ac・Bc（技法−顔料・日本画）、Ad・Bd（コンピューター写真）、Ae・Be（コンピューターメディア）、Af・Bf（素材−木・紙）、Ag・Bg（素材−金属）、Ah・Bh（素材−フェルト）を（選択）必修科目とする。

3 年次は、1 年次での専攻と美術の基礎、2 年次での専門（コース・ゼミ）の基礎の上に、各自の発想を表現に結びつけるためにコンセプトの熟成をおこない、表現に適した専門技術の修練に努める。

芸術表象専攻において、実技制作を目指す場合、美術学科内専攻の実技指導を受ける事になる。洋画専攻、日本画専攻、立体アート専攻の学生が理論研究を目指す場合、芸術表象専攻のゼミに参加することになる。芸術表象専攻は美術学科全ての専攻にまたがる理論のプラットフォームの役割を担う。

4 年次は、4 年間の集大成として、各自の主題の明確化につとめ、その表現に必要な専門の技術を錬磨し独創性のある作品制作または理論研究を目指す。

［美術学科　洋画専攻］

カリキュラム編成の特徴

［ 1 年次］

「絵画 Ａ」では油彩画を中心に、対象を観察して描く絵画の基本を学ぶ。「絵画 Ｂ」は発想を作品に展開する方法や技術の基礎を学ぶ。また、作品のベースとなる考えや制作過程を記録しポートフォリオを作成する。

［ 2 年次］

絵画コースと版画コースに分かれる。絵画コースは、「絵画Ａ」で描くことの基本を、「絵画Ｂ」で油彩画にとどまらずさまざまな表現方法を追究する。版画コースは、木版、銅版、石版、シルクスクリーンの基礎的技術を学ぶ。ポートフォリオの作成を継続する。

［ 3 年次］

絵画コース、版画コースにおいて、創造的発想を表現につなげるための専門的な技術を習得する。講評会で自作品について批評・解説を行えるようにプレゼンテーション能力を高める。

［ 4 年次］

これまでに養った創造的表現力や表現方法を土台に、テーマを明確化することで独自な作品制作を目指す。ゼミ形式で各自の発想を総合的に展開し、社会的な創作活動の出発点となる

卒業制作を行う。

［美術学科　日本画専攻］

カリキュラム編成の特徴

（１）日本画の制作研究を軸に、デッサン・写生・構成研究・古典研究・素材研究・学外研究、および他分野の実技制作が連動し、全体の一体感を計る。

（２）1・2 年次でしっかりとした基礎意識、造形力を養い、個々の感性に沿った表現までスムーズに移行できるようカリキュラムを編成している。

（３）学生と教員間の討論、研究の場として話し合いをかさね、基本的な造形力・構成力を確実なものとする。

（４）古典研究を深めその技法を習得する一方、現在の日本画材料・技法を研究し、その発展の可能性を追求する為、模本や素材研究設備を充実し時間を割いた。

（５）他専攻実技の体験、他分野との共同講義・演習により視野を広げ、より柔軟な思考と創造の基本を把握する。

（６）学外研究時間の充実により授業形態を多様化し、多くの視覚体験と写生研究を促進する。

・日本画制作

〔日本画基礎　ＩＡ〕〔日本画基礎　ＩＢ〕〔日本画基礎　ⅡＡ〕〔日本画基礎　ⅡＢ〕〔日本画研究　ＩＡ〕〔日本画研究　ＩＢ〕〔日本画研究　Ⅱ〕〔卒業制作〕。

日本画の基礎から始まり、個性ある表現まで日本画材料による課題制作で、カリキュラムの軸となる。

〔１〕描写研究

写生旅行や近隣の公園、モデルのデッサン、動物園、水族館の写生等により、対象を的確に観察把握し表現できる力を養う。

〔２〕構成研究

写生からのエスキース、下絵の研究により、基礎となる画面構成力、造形力を高める。

〔３〕討論研究制作

講評会、ゲスト講師を交えての講評会により、学生と教員間または学生間で、新たなる問題提起、討論研究、制作を行い、創造の原点を探る。

〔４〕古典研究

模本を使い模写を行い古典への考察を深め、現代日本画との関連性、およびその発展性を追求する。

〔５〕日本画素材研究

それぞれの分野の専門家を講師に、日本画の用具、用材を研究し、材料の特性をしっかりと把握するとともにその可能性を研究する。

〔６〕他分野実技、素材研究

〔美術共通実技Ａ〕〔美術共通実技Ｂ〕で他専攻の実技を体験し、〔美術共通演習Ａ〕〔美術共通演習Ｂ〕により、他分野の素材の知識と扱い方を習得し視野を広げ、新たなる試みに挑戦する。

〔７〕学外研究

美術館・ギャラリー等での作品鑑賞、日本画材料の製造工程の見学、写生旅行、動物写生などを学外研究として行う。

［美術学科　立体アート専攻］

カリキュラム編成の特徴

1 年次　素材演習で粘土・紙・木・石・金属の素材に触れ、基礎となる技法を学ぶ。「彫塑基礎 Ⅰ」や「絵画」でデッサンやトルソ・頭像制作を行い、立体の基礎を学ぶ。
また、「美術共通実技」で他専攻の実技に取り組む。

2 年次　「素材実習」で各素材の技術を習得し、小作品を制作する。
「工芸」では用の美を学び、「立体基礎」では素材を選択し作品を完成させる。
「彫塑基礎 Ⅱ」で塑造による全身像を制作する。また「造形表現演習」において他ジャンルの芸術の理解を深め表現法について考察する。しっかりとした基礎をかため 3 年次に繋ぐ。

3 年次　「塑造」「紙」「木」「石」「金属」の中から好きな素材を選択する。高度な技術を身につけ、表現の幅を広げ、独自の表現法を模索する。

4 年次　3 年次に選択した素材で、前期には卒業制作に繋がる作品を自由に制作し、後期には各自のテーマによる集大成となる卒業制作の作品を制作する。

［美術学科　芸術表象専攻］

カリキュラム編成の特徴

第一線で活動するアーティストやディレクタ、キュレータから、現代美術の多様な実践の手法を学ぶ「アートプラクティス演習」、アート作品と現代思想の関係を探求する「芸術表象理論」、現代文化を超域的に学ぶ「芸術表象 ID（インター・ディシプナリ）ゼミ」など、ユニークなカリキュラムが組まれている。展覧会の企画・運営、カタログや冊子の編集を行うのも特徴のひとつである。制作については、美術学科の他専攻、洋画、日本画、立体アートで指導を受けることができる。2 年次後期からゼミに所属し、卒業までの 3 年間をかけて、卒業制作あるいは論文に取り組むことができる。

［美術学科　美術教育専攻］

カリキュラム編成の特徴

（1）実技を学ぶ造形表現 A（1 年次　造形表現基礎ⅠA、2 年次　造形表現基礎ⅡA、3 年次　造形表現研究ⅠA）は、絵画、立体表現、コンピュータ実習の３つの柱で構成されている。美術の多様な表現について、基礎から独自の表現による作品制作までをめざす。

（2）造形表現 B（1 年次　造形表現基礎ⅠB、2 年次　造形表現基礎ⅡB、3 年次　造形表現研究ⅠB）では、他専攻の実技体験を通して幅広い表現方法を学ぶだけでなく、独自の表現を追究する専門性を高める。

（3）２・３年次の美術教育に関する専門科目には、美術教育の理論を学ぶ講義と教育現場で必要な実践的指導力を身に付ける演習があり、教師に求められる豊かな人間性、コ

ミュニケーション能力など総合的な人間力を高めることをめざす。

＜デザイン･工芸学科＞

カリキュラム編成の特徴

学科共通科目は、デザイン・工芸に関する幅広い基礎を学ぶ科目群である。デザイン・工芸選択実技Ａ、デザイン・工芸選択実技Ｂは、各専攻における横断的実技を学ぶ科目である。横断的な理論的知識を学ぶ科目としては、必修科目のデザイン・工芸論Ａ、デザイン・工芸論Ｂのほか、デザイン図法、印刷概論、プロダクトデザイン概論、環境デザイン概論、工芸史Ａ、工芸史Ｂなどのデザイン・工芸に関する基礎的な講義・演習科目があり、各自が学習計画をたてて選択履修する。

[デザイン・工芸学科　ヴィジュアルデザイン専攻]

カリキュラム編成の特徴

1 年次　各デザイン分野（平面的分野に限定しない）に共通する基礎を学ぶ

2 年次　ヴィジュアルデザインに必要なスキルを学び、より専門的な基礎を習得する。

3 年次　これまでに習得したデザインの基礎知識を応用、展開してオリジナリティのある作品およびヴィジュアルデザインの可能性を追究する。

4 年次　4 年間の集大成としての卒業制作を、各自がテーマを設定し、各ゼミに分かれて制作する。

[デザイン・工芸学科　プロダクトデザイン専攻]

カリキュラム編成の特徴

1 年次

【体験からの発見】

立体・平面・空間・工芸の造形とデザインの基礎を、プロダクトデザイン基礎演習、デザイン・工芸選択実技、図法、CG 演習Ⅰなど、多角的な実技・演習を通じ、体験・習得する。

2 年次

【モノとコトを知る】

素材に触れる実技課題を基本とし、概論、デザイン史、レンダリング・CG 演習Ⅱなど、「モノとコト」の本質を知るために必要な、専門知識や技術を体験・習得する。

3 年次

【発想からの創造】

様々な製品デザインの実技課題を通じ、幅広いデザイン力を身につけていきます。魅力ある提案に向け、造形力を鍛え、多様なプロジェクトを通じ、レベルの高い発想力を習得する。

4 年次

【社会性と個のデザイン力の確認】

社会に視点を向け、自己の個性・デザイン力を再認識し、卒業制作では、4 年間の集大成

として、問題を発見・提起し、魅力ある創造・提案に挑戦する。

［デザイン・工芸学科　環境デザイン専攻］

カリキュラム編成の特徴

1 年次

デザインの基礎的な課題（平面・立体・空間）をとおして、空間デザインの発想力を学ぶと同時に、デザイン・工芸領域の科目を自由に選択し、基礎的な知識と技能を学ぶ。

2 年次

環境デザインの基礎授業として、家具・ディスプレイデザイン・インテリア・庭・公園など内部・外部空間を様々な材料を使ってデザインすることを学ぶ。

3 年次

住宅系・商業系・街路景観系など、広い環境デザイン領域から、自らの志望にあった課題を選択・計画し、専門性を深める。また希望者は企業研修等でデザインの現場を体験する。

4 年次

前期は、自らの志望を更に深めるための課題を行い、後期は、テーマを自由に選択し 4 年間の集大成として卒業制作をする。専門領域の研究室でのゼミ形式授業である。

※デザイン・工芸学科環境デザイン専攻では、在学中に取得した科目によって、次の受験資格を取得できる。

・一級建築士受験資格　（要必須科目・要実務経験 3 年・要試験合格）
・二級建築士受験資格　（要必須科目・要試験合格）
・木造建築士受験資格　（要必須科目・要試験合格）
・インテリアプランナー　（要必須科目・要実務経験 2 年・要試験合格）

［デザイン・工芸学科　工芸専攻］

カリキュラム編成の特徴

●段階的なカリキュラム

工芸専攻では染・織・刺繍・陶・ガラスの 5 つの分野の工芸素材を扱う。

1 年次ではまずそれぞれの分野で扱う素材に触れ、技法の基礎を学ぶことによって素材の特性を理解する。2 年次で「テキスタイルコース」または「陶・ガラスコース」のいずれかを選択し、専門的な知識と技術・技法を習得し、素材への理解を深める。3 年次からは、それぞれのコースでさらに染・織・刺繍、陶・ガラスの専門分野に分かれて学ぶ。時間をかけて知識と技術を積み上げていくことで幅広く深い創作活動を展開していく。段階的なカリキュラムとコースを超えて学ぶことができ、高い専門性を持った教員達が異なる視点から指導する体制により、4 年次の卒業制作へと繋げる。

●多彩な授業科目

デザイン・工芸学科工芸専攻では、伝統と先端、実習と知識のバランスを考慮した多彩な授業科目により、伝統工芸から現代アートまで、精神性を追求した美術から機能性を重視したデザインまで、自由な創作活動が可能となる。

また、学外研修・工房見学・特別講師による講義・学外展等、新しい企画を加えて学生の創

作意欲を刺激するとともに、社会との接点を見出していく。

【必修または選択必修科目】

1 年次：CG 演習、デザイン・工芸論、デザイン・工芸選択実技

2 年次：工芸史、材料学

3 年次：プレゼンテーション演習

【学科共通科目】

造形演習、現代造形論、空間演出論、文様史、テキスタイル表現論、伝統染織文化論、日本服装史など。

テキスタイルコース

染　：型染や注染の伝統技法やシルクスクリーンなどを学び、デザインの可能性を広げる。

織　：絣などの伝統技術からテキスタイルアートまで、繊維素材を用いた自由な表現を展開する。

刺繍　：伝統的な日本刺繍を基本にマシーン刺繍や海外の刺繍などを学び、ステッチによる独創的な創作を目指す。

陶・ガラスコース

陶　：粘土と釉（うわぐすり）などの素材を約 800～1300 度の高温で焼成することで造形表現を追及する。

ガラス：吹きガラスやキルンワークなどの技法を用いて、ガラスの特性を生かした新しいガラス造形を展開する。

＜アート･デザイン表現学科＞

カリキュラム編成の特徴

学科共通科目は、アートとデザインに関する基礎を学ぶ科目群であり、各領域を学ぶための導入科目として、「アート・デザイン表現基礎演習Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」、「宇宙・人間・アート」、「アート表現論」を必修科目として配置するとともに、各領域に対する基本的な理解を深めるための科目として、「アート・デザイン表現演習Ⅰ」、「アート・デザイン表現演習Ⅱ」を必修科目としている。

アート・デザイン表現学科のカリキュラムの大きな特徴として、学科共通科目を 1 年次から 3 年次に渡って実施する。先ず 1 年次では、領域に分かれ専門教育に入る前に、アートとデザインに関する基礎を学ぶ。2 年次では、コミュニケーションを重視した学科全体で実施する演習科目、3 年次では、他領域の専門科目を学ぶことができる演習科目がある。カリキュラムの上でもコミュニケーションとコラボレーションを重視した編成になっている。

［アート・デザイン表現学科　メディア表現領域］

カリキュラム編成の特徴

メディア表現領域では、アートとデザインの基礎を重視した上で、先端的なメディア・テクノロジーを前提とした教育を行うと共に、メディアデザインとメディアアートに必要な専門科目でカリキュラムを構成している。

1 年次では、アート・デザイン表現学科共通科目「アート・デザイン表現基礎演習Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ」によって絵画や立体、デザインや工芸を学び、「コミュニケーションデザイン演習Ａ」で Ｗｅｂ デザイン、「コミュニケーションデザイン演習Ｂ」で紙を媒体としたグラフィックデザイン、「映像基礎演習」で実写を中心とした映像の基本を身に付け、「空間基礎演習」で空間のスケール感を理解することによってメディア表現の基礎を習得する。

2 年次以降は、ストーリーを重視したアニメーションやサウンドデザイン、キャラクターデザイン、グラフィックデザイン、Ｗｅｂ 制作、インタラクティブ表現の基礎を理解し、マネジメント、プロデュース、演出などの理論を学ぶ。また、プロジェクトを通してコラボレーションの方法、プレゼンテーションの手法を身につけるのと同時に、実社会で必要なデジタル知的財産の問題やコンテンツプロデュースやメディアマネージメントなどについても考えていく。メディア表現を理論と実践から学び、発想を重視したメディアデザインの企画や表現、独創的なメディアアート作品制作など各自のオリジナルな表現を追究し、卒業制作で集大成する。

**[アート・デザイン表現学科　ヒーリング表現領域]**

**カリキュラム編成の特徴**

1 年次

前期では、アート・デザイン表現学科共通の基礎実技として、コンピュータグラフィック、絵画、工芸、立体の表現を学ぶ。アート・デザイン表現の根源となる観察描写表現を、年間を通して継続的に行う。後期では、平面素材・立体素材の表現、キャラクター表現の基礎を徹底して学び、ワークショップから、コミュニケーション能力と問題解決の手法を学ぶ。

2 年次

空間デザイン、コンピュータグラフィック、壁画制作技法、絵本創作の基礎、装丁技法の実習から創作表現の基本を身につけて行くと同時に、ヒーリングについて各自がしっかりと考えていく。

3 年次

学外の様々なプロジェクトに実際に取組むことにより、社会との連携を実践的に学ぶ。グラフィック表現（キャラクターデザイン、絵本創作、壁画制作）と立体表現（形態表現、子供の道具、おもちゃのデザイン、ぬいぐるみ）の実技を選択し、そこから専門性を深めていく。

4 年次

前期授業では、グラフィック表現と立体・空間表現・ユニバーサルデザイン、ユニバーサルアートの専門実技を各自選択して研究を深め、さらにプレゼンテーション能力を高める発表会を重ね、自己を高めていく。

後期授業は、4 年間の学びの集大成として、各自が目的を持って卒業制作に取組む。

※実技授業に加え、理論と知識を深めるため、ヒーリング表現領域の専門科目として、実技と関連した特色ある講義を開設する。

1 年次は、「ヒーリング・デザイン概論」、「癒しの文化論」

2 年次は、「キャラクター文化論」、「カラーセラピー概論」、「絵本芸術論」、「子どもの福祉デザイン概論」

3 年次は、「芸術療法概論」、「空間デザイン概論」、「アンケート調査・分析法」など実技内容と関連した、専門性を深める講義を開設する。

このような授業体系を通じて、日常生活、社会生活の中で、人々が『癒し』を求める現代社会にあって、アートとデザインは何ができるのか？それを作品制作と理論研究から探っていく。

**[アート・デザイン表現学科　ファッションテキスタイル表現領域]**

**カリキュラム編成の特徴**

[ 1 年次] 基礎課程（アート&デザインを学ぶ）

植物や食材から染める技法を習得し、テキスタイルデザインから制作までを実施。デザインした布を用いてスカート・シャツの設計・製図を学び、衣服制作へとつなげ、素材からデザインまでの一連のクリエーションの基本を学ぶ。

[ 2 年次] 基礎課程（アート&デザインを学ぶ）

テキスタイルの基本とも言えるシルクスクリーンの技法を習得し、テキスタイルから衣服やインテリアの制作までを学ぶ。テキスタイルデザインした布を用いて空間や場、インテリアと衣服の関係からファッションデザイン（ワンピース）の制作を行い、身体表現やパフォーマンスなどを取り入れた効果的な作品発表を行う。

[ 3 年次] 応用課程：専門領域を選ぶ（各自が将来に生かす領域「アート」か「デザイン」を選び学ぶ)

各自がアートとデザインのいずれかの学ぶ領域を選択し、各領域での課題を実施する。地域社会と連携したアートプロジェクトや、企業と行うデザインプロジェクトなども実践しながら、コンセプトから企画立案し、効果的な作品発表をするための演出・構成についても学ぶ。

[ 4 年次] 応用課程、卒業制作課程

アートとデザインそれぞれの視点から、各自が志向する制作領域（アート・デザイン領域や大学院進学等）をベースに「社会と衣服の関係や衣服の社会貢献」をテーマに課題を実施する。後期は 4 年間の集大成として独自性あるアートとデザイン作品の制作を行い発表、展示する。

**[アート・デザイン表現学科　アートプロデュース表現領域]**

**カリキュラム編成の特徴**

[ 1 年次]

まず、アート・デザイン表現学科共通の基礎となる理論と実習を学ぶ。併せて、アートプロデュース領域の根幹をなす、ミュージアムスタディとアートプロデュースの基礎理論を学ぶ。

[ 2 年次]

美術、音楽、演劇、映像の、アートプロデュースに関わる、さまざまな基礎的演習を学ぶ。パントマイムによる身体表現の演習もあり、心と体の解放を目指す。

[ 3 年次]

2 年次に学んだ理論と実践をさらに深める。「音楽プロデュース演習Ⅱ」ではジャズを中

心に、改めて音楽の楽しさを学ぶ。

［ 4 年次］

3 年次までに学んだ理論と実践を踏まえ、総合的なアートイベントを企画する。

**≪大学院≫**

**〇専門分野の高度化に対応した教育内容の提供**

専任教員は、常に自らの専門分野の中で最新の研究成果を取り入れた教育を行っている。その際、自らの授業を履修する学生、また研究指導にあたる学生の興味や関心に従って教育内容を提供している。また、必要に応じて特別講師などを招聘している。

**２．点検・評価**

**（１）効果が上がっている事項**

**≪芸術学部≫**

2010 年度より実施している「基礎学習ゼミ」において、自校史、キャリア教育、情報リテラシー、カリキュラム理解、専門教育の基礎などが扱われており、初年次教育の位置づけで必修科目として教育が可能になった。2011 年度のアンケート結果では、キャリア教育、マナー、情報リテラシーの到達度が高く好評であった。

**（２）改善すべき事項**

**≪芸術学部≫**

多様な入学試験制度により入学者の英語能力に格差があり、学生間での学力差が生じている。授業運営の円滑化を図るため、入学者にプレイスメントテストを実施し、実力別クラス編成を行うことを検討する必要がある。

**３．将来に向けた発展方策**

**（１）効果が上がっている事項**

**≪芸術学部≫**

「基礎学習ゼミ」での教育内容の効果をさらに高めるべく、キャリア関連科目（キャリア形成 A～D、各学科内の社会につながる科目を含むなど）との連携、キャリア支援センターが主催する就職・進路ガイダンス、キャリアデザインセミナー、進路・就職サポートイベント、スキルアップ講座、インターンシップなどの本学独自の正課外プログラムとの相乗効果などを検討する。

**（２）改善すべき事項**

**≪芸術学部≫**

①修得すべき知識・技能の明確化とそれを体系的に明示するため、カリキュラムツリーを作成する。

②教育課程の編成・実施方針と各授業科目との関係性の明確化・図表化として、カリキュラム・マップを作成する。

③実技力が足りない入学者に対する入学前教育について、検討していく。

④2013 年度に完成年度を迎えることから、学部共通科目Ａ～Ｅ群、各専攻・領域の教育課程、

科目の見直しについて、2012 年度に検討していく。

**≪大学院≫**

①大学院修士課程は、芸術学部が 2013 年度に完成年度を迎えることから、卒業生を受け入れるために教育課程の検討を 2012 年度に取り組んでいく。

②文部科学省の重点施策であり 2011～2015 年度に展開される「第 2 次大学院教育振興施策要綱」に関する施策の大学院修士課程・博士後期課程への導入、課程の改善の検討が必要である。

## 教育方法

１．現状の説明

（１）教育方法および学習指導は適切か。

〇教育目標の達成に向けた授業形態（講義・演習・実験等）の採用

≪大学全体≫

授業科目の単位数は､1 単位の授業を 45 時間の学修を必要とする内容を持って構成している。「講義」は 15 時間、「演習」は 15～30 時間、「実技・実習」は 30～45 時間の授業をもって 1 単位としている。時間割の 1 時限は正味 90 分だが、単位上は 2 時間で計算している。2011 年度の授業期間は前期 14 週、後期 14 週の通年 28 週となっている。

授業形態は、教員が指導しながら学生の作業や活動を伴う授業を「演習」形態とし、学生の作業や研究活動を主として機器・機材やスペース上の問題で作業が教室に限られる授業を「実技」形態としている。

≪芸術学部≫

学部共通科目（教養教育）は「講義」「演習」形態を中心とし、外国語コミュニケーション、情報リテラシー、健康科学、スポーツ演習、古美術研究、書道等を学生の作業や活動を伴う授業として「演習」形態、インターンシップを学生の活動を主とするため「実技」としている。

学科専門科目（専門教育）の学科共通科目の必修科目・選択必修科目は「講義」「演習」を中心とし、専攻・領域専門科目の必修科目・選択必修科目は「演習」「実技」を中心としている。専攻・領域専門科目内の授業形態の割合は専攻・領域によって大きく異なっているが、特性に適した教育方法で授業を展開している。

専攻・領域専門科目の授業形態の割合

| | | | 単位数 | | | 割合 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学科 | 専攻･領域 | 専攻･領域専門科目単位計 | 講義 | 演習 | 実技 | 講義 | 演習 | 実技 |
| 美術学科 | 洋画専攻 | 58 | | 6 | 52 | 0% | 10% | 90% |
| | 日本画専攻 | 56 | | | 56 | 0% | 0% | 100% |
| | 立体アート専攻 | 60 | 2 | 5 | 53 | 3% | 8% | 88% |
| | 芸術表象専攻 | 52 | 16 | 36 | | 31% | 69% | 0% |
| デザイン･工芸学科 | ヴィジュアルデザイン専攻 | 64 | | 54 | 10 | 0% | 84% | 16% |
| | プロダクトデザイン専攻 | 64 | 2 | 32 | 30 | 3% | 50% | 47% |
| | 環境デザイン専攻 | 64 | | 35 | 29 | 0% | 55% | 45% |
| | 工芸学科 | 64 | 4 | 4 | 56 | 6% | 6% | 88% |
| アート･デザイン表現学科 | メディア表現領域 | 54 | | 37 | 17 | 0% | 69% | 31% |
| | ヒーリング表現領域 | 54 | | 34 | 20 | 0% | 63% | 37% |
| | ファッションテキスタイル表現領域 | 56 | 2 | 28 | 26 | 4% | 50% | 46% |
| | アートプロデュース表現領域 | 52 | | 47 | 5 | 0% | 90% | 10% |
| | **全学平均** | **698** | **26** | **318** | **354** | **4%** | **46%** | **51%** |

最も高い数値

≪大学院≫

修士課程は美術専攻とデザイン専攻の研究指導科目、芸術創作応用Ⅰ・Ⅱが「実技」形態、共通理論科目が「講義」形態となっている。修了所要 32 単位の内、各研究領域で必修科目 18～22 単位が「演習」「実技」形態であり、そのうち 16 単位が研究指導科目となっている。また博士後期課程は造形計画演習、造形理論特殊研究、特殊研究とも「演習」の形態であり、研究指導には単位を付与していない。修士課程、博士後期課程ともリサーチワークに適した教育方法を展開している。

**○履修科目登録の上限設定、学習指導の充実**

≪大学全体≫

芸術学部の学生が 1 年間に履修登録できる単位の上限は、1 年次が 42 単位、2～4 年次は 49 単位までとしている。なお、教職・学芸員資格科目と一部の科目については、上限対象科目とはしていない。大学院については、履修上限は定めていない。

オリエンテーション期間では履修ガイダンスを実施するとともに、芸術学部生を対象として上級生、教員等による学部共通科目・教職科目個別相談会を実施し、履修計画作成の援助を行っている。授業期間においては各専攻・領域において学習指導を行っており、専任教員によるオフィスアワー制度を設けており、学生への周知を図っている。

大学院においては学生の研究指導科目担当教員が学習指導を担当している。

**○学生の主体的参加を促す授業方法**

≪大学全体≫

前掲の専攻・領域専門科目の授業形態の割合で示すとおり、「演習」「実技」形態を主としており、学生の課題に対する取り組み・意欲に応じた個別指導を行い、学生の主体的参加を促している。「授業に関する学生アンケート」を実施しており、2009 年度の芸術学部全体平均では、5 段階評価で授業出席（設問１）が講義科目 4.32 ポイント・実技科目 4.37 ポイント、受講態度（設問３）が講義科目 3.88 ポイント・実技 4.07 ポイントと、学生自身の自己評価ながら高い値となっており、学生が授業に主体的参加・取り組んでいることを伺うことができる。

2007・2009 年度　授業に関する学生の声アンケート　芸術学部全体平均表

| | | 2007年度 | | 2009年度 | |
|---|---|---|---|---|---|
| No | 設問文 | 講義 | 実技 | 講義 | 実技 |
| 1 | この授業におけるあなたの出席状況を示して下さい。 | 4.28 | 4.34 | 4.32 | 4.37 |
| 2 | この授業におけるあなたの受講態度を自己評価して下さい。 | 3.81 | 4.02 | 3.88 | 4.07 |
| 3 | この授業における授業外での取り組み方を自己評価して下さい。 | 3.49 | 3.91 | 3.61 | 4.01 |
| 4 | 授業の進行は適切に行われましたか。 | 4.12 | 4.20 | 4.27 | 4.30 |
| 5 | 教員は学生の疑問や質問に的確に答えていましたか。 | 4.16 | 4.34 | 4.29 | 4.45 |
| 6 | 教員の授業に対する熱意を感じましたか。 | 4.31 | 4.38 | 4.43 | 4.46 |
| 7 | シラバスの記述・説明は適切でしたか。 | 4.08 | 4.10 | 4.25 | 4.24 |
| 8 | 授業内容や課題の意図が明確に示されましたか。 | 4.14 | 4.23 | 4.29 | 4.36 |
| 9 | 授業で新しい気づきや発見があり、ものの見方や考え方が広がりましたか。 | 4.25 | 4.43 | 4.38 | 4.52 |
| 10 | 担当教員の授業に対する総合評価を示して下さい。 | 4.25 | 4.40 | 4.38 | 4.48 |
| | 全体平均点 | 4.09 | 4.24 | 4.21 | 4.33 |
| | 回答数 | 18,548 | 7,019 | 17,523 | 8,492 |

各専攻・領域により異なるが、ポートフォリオの作成、ゲストを交えた講評会、教員と学生間での問題提起や討論研究、ゼミ形式の授業、授業内外でも行っている企業等とのプロジェクト等の実践教育を通じて、学生の学習への動機と意欲を高めている。

文部科学省より採択されたＧＰ（Good Practice：教育の質向上に向けた取組や政策課題対応型の優れた取組など、大学における学生教育の質の向上を目指す個性・特色のある優れた取組）は、以下のとおりである。ＧＰに附随して発生する多くのプロジェクトに学生が参加し、演習２単位分の活動・取組みがあった場合、学部共通科目Ｅ群のサービス・ラーニングとして単位を付与しており、正課外活動への参加を促している。（一部サービス・ラーニングとしてプロジェクトを実施しないＧＰもある。）

≪大学院≫

修士課程は、修了所要 36 単位の内、24 単位が「演習」「実技」形態であり、うち 16 単位がリサーチワークの研究指導科目となっている。また博士後期課程についてもリサーチワークの研究指導への取組みが学位申請に繋がっており、主体的参加と取組みを促している。

大学院には芸術文化専攻関連演習科目に社会芸術プログラムという科目があり、大学院ＧＰ等の関連するプロジェクトに対して、芸術学部のサービス・ラーニングと同じ方法で単位を付与しており、正課外活動への参加を促している。

**ＧＰ採択一覧**

１.〔2004 年度特色ＧＰ採択〕芸術学部
「美大におけるサービス･ラーニングの実践　ーアートを通じた大学と医療･福祉施設との連携」

２.〔2007 年度特色ＧＰ採択〕芸術学部
「問題解決型美術大学教育の実践ーアート＆デザイン・ファシリテーターの養成ー」

３.〔2008 年度教育ＧＰ採択〕芸術学部
「素材と環境教育が促す日本ブランド力の発信ー素材と環境教育を通した体験フィールド創出プログラムー」

４.〔2008 年度学生支援ＧＰ採択〕芸術学部
「美大でのリエゾン型キャリア形成支援の展開　ーキャリアポートフォリオを携えてソーシャルデビューー」

５.〔2010 年度大学生の就業力育成支援事業採択〕芸術学部
「職業的自立と美大の就業カリテラシーの養成ーe-コミュニティ形成と発信力強化の取り組みー」

６.〔2008 年度大学院ＧＰ採択〕大学院
「表現空間創出による高度人材育成と職域開発-実践的プラットフォームとアートセンター機能による大学院の実践主体化」

**〇研究指導計画に基づく研究指導・学位論文作成指導**

**≪大学院≫**

修士課程においては研究指導科目を 2 年間履修し、各学生の研究制作、研究テーマに基づいて、研究指導科目の担当教員によって研究指導が行われ、そのもとで修了作品または修士論文を作成する。

博士後期課程については、研究指導教員を担当として研究指導を 3 年間履修する。1 年次に造形研究計画演習にて研究計画の基本的枠組みを立案し、実技を中心として習得してきた学生については、理論系教員が加わり、理論的研究の進め方を指導する。1・2 年次において、国内外の文献研究や実証研究の方法論を習得する造形理論特殊研究、特定分野をより深く体系的に研究する特殊研究を履修し、博士論文作成と修了制作（実技系分野のみ）に備える。主指導教員 1 名、副指導教員 1 名、必要に応じて論文指導教員と特別研究指導教員を選出し、その指導のもとで学位論文を作成する。

**（２）シラバスに基づいて授業が展開されているか。**

**〇シラバスの作成と内容の充実**

**≪大学全体≫**

シラバスは 2011 年度よりＷｅｂシラバスを導入し、教職員学生用ポータルサイトとともに、本学ホームページにおいても検索画面を用意し、学外へシラバスを公開している。

掲載内容は、科目名や担当教員等の授業に関するデータと、「授業内容」、「授業計画」、「到達目標」、「授業以外の学習方法」（予習・授業準備・復習等）、「評価方法」を必須項目として、「履

修者への注意事項」、「テキスト」、「参考文献・参考資料」、「参考リンク」を任意項目としている。また、芸術学部は「科目キーワード」を必須として設けている。

上記を学生に伝達することによって、学生が主体的に学習するための情報を提供するとともに、到達目標を定めて体系的に学習する意義をシラバスが伝える役割を担っている。「評価方法」については、評価項目と各割合（重み）を具体的な数字（%）での記載を徹底し、学生に評価割合を明示することに努めている。「授業以外の学習方法」（予習・授業準備・復習等）も記載の徹底に努め、学生に明示しているが、その内容には指針や事例を示すことの検討が必要である。

**○授業内容・方法とシラバスとの整合性**

**≪芸術学部≫**

**「授業に関する学生アンケート」の 2009 年度の芸術学部全体平均では、5 段階評価でシラバス（前掲表　設問 7）が講義科目 4.25 ポイント・実技科目 4.24 ポイントと高い値となっており、授業内容とシラバスの整合性を示している。**

**≪大学院≫**

大学院については「授業に関する学生の声アンケート」の対象が関連演習科目と共通理論科目の講義科目のみの数値となっているが、同じく 5 段階評価で 4.08 ポイントとなっており、授業内容とシラバスの整合性を示している。

**（３）成績評価と単位認定は適切に行われているか。**

**○厳格な成績評価（評価方法・評価基準の明示）**

**○単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性**

**≪大学全体≫**

成績評価は、シラバスに明示している各授業科目の「授業内容」「到達目標」および「評価方法」の評価項目と各割合（重み）を持って、公正・厳格に行っている。学科専門科目（専門教育）中に「実技」「演習」形態授業が多い本学では、複数教員による採点または授業内で複数教員による講評を行うことにより、評価の公正性・客観性を保持している。

前述の通り、授業科目の単位数は、1 単位の授業を 45 時間の学修を必要とする内容を持って構成している。「講義」は 15 時間、「演習」は 15～30 時間、「実技・実習」は 30～45 時間の授業をもって 1 単位としている。時間割の 1 時限は正味 90 分だが、単位上は 2 時間で計算している。2011 年度の授業期間は前期 14 週、後期 14 週の通年 28 週となっているが、2012 年度より前期 15 週、後期 15 週の通年 30 週に改める。授業以外の学習時間については、シラバスの「授業以外の学習方法」（予習・授業準備・復習等）の項目を用意し、取り組むべき内容を学生に明示している。

前掲の「2007・2009 年度 授業に関する学生の声アンケート 芸術学部全体平均表」では、「授業外での取組み方を自己評価して下さい」という設問に対し、2009 年度は 5 段階評価で講義科目 3.61 ポイント、実技科目 4.01 ポイントとなっている。特に実技科目が高い数値であり、学生が主体性をもって学習に取り組んでいることが分かる。大学院は講義科目のみであるが、3.67 ポイントとなっている。

成績評価は下表のとおりであり、単位の認定は試験等の評価がＣ以上だった科目を合格とし、所定の単位を付与している。

| 合格 | | | | 不合格 | 採点不可 |
|---|---|---|---|---|---|
| S | A | B | C | D | F |
| 100～90 点 | 89～80 点 | 79～70 点 | 69～60 点 | 59 点以下 | 採点対象外（出席不良等） |

試験（筆記試験・レポート・課題等）は次に該当する者は受験資格がないものとしている。

①当該授業科目の履修登録をしなかった者

②出席が授業回数の３分の２に満たない者

③授業料を無断で滞納している者。

卒業年次においては、卒業必要科目が不合格である者に対して再試験制度を設けている。

成績評価に疑問がある学生は、成績評価が「Ｄ」「Ｆ」に限り、所定の期間に「採点調査願」を教育支援センターに提出し調査することができる。

芸術学部の学生が１年間に履修登録できる単位の上限は、１年次が 42 単位、2～4 年次は 49 単位までとしている。大学院に履修上限は設けていない。

**○既習得単位認定の適切性**

**≪芸術学部≫**

入学以前に在学した大学、短期大学、高等専門学校の専攻科および文部科学大臣が定める学修において修得した授業科目および単位の認定を希望する者は、「既修得単位認定願」を前在大学等が発行した「成績ならびに単位修得証明書」とシラバス、もしくは外国語検定資格の技能審査等における学修成果の証明書を添付して、認定を願い出ることができる。教育支援センターにおいて、前在大学等の証明書およびシラバス、外国語検定資格の技能審査等における学修成果の証明書を確認し、認定の可否を判断し、学生に通知している。

また、外国語検定資格技能審査を受験した場合、検定試験日より 2 年以内（入学前、入学後在学中を問わず）であればその結果により、以下のとおり学部共通科目Ｂ群の単位として認定している。

学生には、『履修の手引』に既修得単位および外国語検定資格の技能審査による認定について記載し周知しており、これに基づいて認定を行っている。

**外国語検定資格技能審査結果に基づく単位認定表**

**英語**

| 認定科目名 | 認定単位数 | 実用英語技能検定 | ＴＯＥＩＣ※ | ＴＯＥＦＬ（ＰＢＴ）※ | ＴＯＥＦＬ（ＣＢＴ） | ＴＯＥＦＬ（ｉＢＴ） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 英語Ⅰ | 2 単位 | 2 級 | 470～ | 470～ | 140～ | 48～ |
| 英語Ⅰ＋Ⅱ | 各 2 単位 | 準 1 級以上 | 730～ | 550～ | 213～ | 79～ |

※　学内実施のＴＯＥＩＣ（ＩＰ）、ＴＯＥＦＬ（ＩＴＰ）、はＴＯＥＦＬ（ＰＢＴ）のスコアとして扱い、認定する。

フランス語・イタリア語・ドイツ語

| 認定科目名 | 認定単位数 | 実用ﾌﾗﾝｽ・実用ｲﾀﾘｱ・ﾄﾞｲﾂ語<br>技能検定 |
|---|---|---|
| ﾌﾗﾝｽ・ｲﾀﾘｱ・ﾄﾞｲﾂ語Ⅰ | 2 単位 | 3 級 |
| ﾌﾗﾝｽ・ｲﾀﾘｱ・ﾄﾞｲﾂ語Ⅰ＋Ⅱ | 各 2 単位 | 2 級以上 |

日本語

| 認定科目名 | 認定単位数 | 日本語<br>能力検定 |
|---|---|---|
| 日本語Ⅰ | 2 単位 | Ｎ１（１級） |

中国語

| 認定科目名 | 認定単位数 | 中国語検定 | 中国語ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ<br>能力検定（TECC） | 実用中国語<br>技能検定 | 漢字水平考査<br>（HSK） |
|---|---|---|---|---|---|
| 中国語Ⅰ | 2 単位 | 3 級 | 400～ | 4 級 | 3 級 |
| 中国語Ⅰ＋Ⅱ | 各 2 単位 | 2 級以上 | 550～ | 3 級以上 | 4 級以上 |

単位互換制度に基づく単位の認定については、以下のとおりである。

首都圏西部大学単位互換協定（全 28 大学・短期大学）に基づく履修は、2 年次生以上を対象（4 年次生は卒業必要単位数の確保が十分に見込まれる者のみ）に、単年度で最大 8 単位まで履修可能としており単位認定を行うが、成績評価は行っていない。申請にあたっては、各所属研究室または担任の許可を必要としており、本学での学修に重点を置いている。

また、本学短期大学部の開設科目は、全芸術学部生を対象とし、単年度で最大 8 単位まで履修可能であり、修得した単位は学部共通科目（A～E 群）の卒業所要単位として認定している。

協定海外留学（短期プログラム）では留学先で延べ 60～90 時間の正規授業科目を履修し、単位修得の申請があった場合、合格の成績評価をもって芸術学部は「国際芸術プログラム」2 単位を付与している。また、協定海外留学（長期プログラム）・認定海外留学においては、留学先で修得した単位のうち 60 単位をこえない範囲で、海外留学ハンドブックに記載された方法に基づき単位認定している。

≪大学院≫

女子美術大学大学院学則第 25 条（他大学院などにおける授業科目の履修）に定められており、主に協定海外留学（長期プログラム）・認定海外留学において、留学先で修得した単位のうち 10 単位をこえない範囲で、海外留学ハンドブックに記載された方法に基づき単位認定を行っている。また、協定海外留学（短期プログラム）では留学先で延べ 60～90 時間の正規授業科目を履修し、単位修得の申請があった場合、合格の成績評価をもって大学院は『海外芸術プログラム』2 単位を付与している。入学以前に在学した大学院の単位認定は行っていない。

各授業の改善のために「授業に関する学生の声アンケート」を毎年全学で実施している。アンケートの授業別集計データは担当教員に配付され、担当教員の授業改善に繋がっている。担当教員にはアンケート実施授業の集計結果と記述欄を設けた考察（コメント）用紙を併せて配付し、記述欄にアンケート集計結果のコメント、自由記述欄へのコメント、今後の授業改善に

ついてなどの記述を求めている。考察（コメント）用紙は、「授業に関する学生の声アンケート集計結果」として、記述の有無を問わず全考察（コメント）用紙を冊子化し、教職員、学生は図書館にて公表している。

アンケートの実施基準として5名以下の場合は個人特定の観点から実施していない。

大学院については関連演習科目と共通理論科目のみを実施対象としている。研究指導科目はリサーチワークであり、アンケート設問に有効性がないため実施対象としていない。

また、「授業に関する学生の声アンケート」を個別授業の集計だけではなく、大学院や芸術学部の「大分類」、「科目群」「学年」「講義・実技別」「クラス規模」などを切り口に集計し、教育課程を俯瞰して分析することを目的に「女子美術大学　授業に関する学生の声アンケート全体講評」を作成している。資料は教務委員会において委員に配付されて、教育課程全体、科目群全体での分析や改善の一助となっている。

ＦＤ研修として全専任教員を対象として「公開授業」の活動を行い、2004～2010 年度の期間で、ほぼ全教員１回は公開授業・講評会を実施した。講評会によって参加者から授業方法についてのアドバイス・助言があり、担当教員の授業改善に繋がっている。2011～2015 年度の 5 年間で全専任教員が実施するものとして「公開授業」の第二期が実施されている。

## ２．点検・評価

### （１）効果が上がっている事項

**≪大学全体≫**

①学生が主体的に学習するために必要な情報をシラバスにおいて提供している。また、2010 年度より導入したＷｅｂシラバスによって、学生はポータルサイトでシラバスの検索が可能になった。履修登録以降にシラバスを参照することが容易となり、主体的に学習するための環境が整った。

②ＧＰに採択された取り組みが 6 件にも上り、今後もこれらの教育の取組みを推進し、教育の質の向上を図るとともに、より一層、学生の主体性を伸ばす教育に取り組んでいく。

### （２）改善すべき事項

**≪芸術学部≫**

2011 年 3 月 12 日付「大学設置基準および短大設置基準の一部を改正する省令の施行について」（通知）に基づき、学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的及び職業的自立を図るための能力を教育課程の実施及び厚生補導を通じて培うことができるよう、大学内の組織間の有機的な連携をさらに進める必要がある。

## ３．将来に向けた発展方策

### （１）効果が上がっている事項

**≪大学全体≫**

シラバスの「授業以外の学習方法」（予習・授業準備・復習等）の記載内容の指針や事例を検討し、より一層、学生の主体性を伸ばす教育を行っていく。

### （２）改善すべき事項

**≪芸術学部≫**

①学生の学習を促すため、ＧＰＡ制度の導入とそれに伴う履修上限、進級制度、卒業所要ＧＰＡの数値等の検討が必要である。

※ＧＰＡ（Grade Point Average）制度とは、授業科目ごとの成績評価を、成績毎にポイント化し、単位あたりの平均ポイントにより成績管理等の基準として用いる制度

②単位の取得状況、ＧＰＡの数値を学生の履修指導に役立て、低単位取得者、ＧＰＡ大幅低下者、出席不良者への面談制度を導入し、学習支援、休退学予防を図る必要がある。

③各科目の成績分布資料の作成と分析、到達目標に求めるレベルの調整の検討が必要である。

④現行の成績評価基準は点数のみであるが、到達目標に求めるレベルと合せて、到達目標との関係性を文章として作成し、点数の指針を検討する必要がある。

（例：S…100～90 点…当該科目の到達目標の内容をほぼ完全に習得し、応用する力が付いている、大幅に上回り模範となっていることが認められる。）

それに合わせてシラバスの「到達目標」を成績評価基準に合わせ、到達基準の具体的記述に連動させることの検討も必要である。

⑤シラバスの「到達目標」を成績評価基準に合わせた後、カリキュラム・マップと「到達目標」の関係性の確認と検証が必要である。

## 成果

### １．現状の説明

### （１）教育目標に沿った成果が上がっているか。

**〇進路状況**

**≪芸術学部≫**

卒業生に対する進学者の割合は、過去３ヵ年で 11～13%程度と、大きな変化はないが、卒業生数に対する就職者数は 50%弱から 30%程度に減少している。就職活動は長期化おり、卒業後に就職がきまる学生もおり、この比率は上昇するものと考えられる。

職種別の就職状況は、概ね６割以上が大学で学んだ専門知識や技術を活かした職種に就職している。また業種別では、広告・デザイン、情報サービス、服飾などの就職者の割合が比較的高い。

卒業年次での就職率としては減少しているが、一方で、最大手広告代理店やキャラクター企業など超難関といわれる企業へ専門職で内定を受ける学生もおり、優秀な学生が減っているわけではない。企業の採用担当者からも、他美大の内定者と比較しても特に優秀であるという評価を得ることが多い。

就職率を下げている要因の一つは、今まで問題なく内定を獲得していた中間レベル層の学生達の内定獲得が著しく厳しくなってきたということである。企業が「超厳選採用」を謳い、採用枠があったとしても「是非とも採用したい人材」以外は採用しないという方針をとることが多くなっていることから、学生個々のレベルを更に上げていくことが必須である。

資格取得の状況は、高校一種・中学一種教員免許状、学芸員ともに 2008 年度と 2009 年度は大きな変化は見られないが、2010 年度は取得者が減少している。2008 年度以前から見ても資格取得者数は、年々減少傾向にある。

学位授与の状況は、留年者が毎年 10%弱いるため 90%前後となっている。

**芸術学部　進路状況（過去３ヵ年）**　（単位：人）

| | 2008 年度 | 2009 年度 | 2010 年度 |
|---|---|---|---|
| 卒業者数 | 652 | 638 | 672 |
| 就職者数 | 305 | 217 | 201 |
| 進学者数 | 71 | 78 | 86 |
| 制作活動 | 36 | 35 | 60 |
| その他 | 240 | 308 | 325 |

**≪大学院≫**

修士課程の修了生に対する進学者の割合は、過去３ヵ年でデザイン専攻以外は若干増えている。就職先を職種別でみると、教職、総合職・一般職が多く、業種別でみると、高い専門の研究分野を活かした教育・美術館などが高い比率となっている。

大学院美術研究科　進路状況（過去３ヵ年）　（単位：人）

| | 2008 年度 | 2009 年度 | 2010 年度 |
|---|---|---|---|
| 卒業者数 | 55 | 57 | 62 |
| 就職者数 | 20 | 18 | 17 |
| 進学者数 | 1 | 2 | 3 |
| 制作活動 | 4 | 11 | 8 |
| その他 | 30 | 26 | 34 |

**○進路支援の状況**

**≪大学全体≫**

キャリア支援センターでは、「早期からの低学年に対する進路への動機付け」と「就職活動に実践的に役立つスキルの向上」に重点をおいて取り組んでいる。「キャリアカーニバル」や「クリエイターズ BOX」などの低学年生の進路に対する興味向上を目指したイベントを立ち上げ、きめ細やかなガイダンスやセミナーの開催など、年間を通し多数のプログラムを実施している。

また、体験型ワークショップ・講座など実践的なスキルアッププログラムなどを充実させることで、社会に出てからの即戦力に繋がるスキルの強化を目指している。

その他、美大特有の学生個々の進路の多様化に対応すべく、就職希望者に対する全員面談の実施や、履歴書・エントリーシートの添削指導、面接練習などの個人面談の強化や企業の情報をリアルタイムに学生へ周知するための企業訪問の強化、きめ細かい個別サポートを行っている。特に面談では、面談回数が多い学生が高い就職率を出してしていることから、面談するスタッフとしてキャリア支援センターの職員以外にも、内定を獲得した 4 年次生を学生アドバイザーとして配置するなど、面談を強化している。また、2010 年度より、キャリア支援センター内に「ライティングセンター」を開設し、毎日、専門のライティングアドバイザーによる履歴書やエントリーシートの添削指導を行っている。

**○学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用**

**≪芸術学部≫**

学習成果の測定は、主として知識面については学期末に授業担当者が行う試験、レポートで行っている。問題解決能力やコミュニケーション能力・対人能力などは、課題の取組み過程、課題提出物･プレゼンテーションなどを基に実施している。授業におけるこれらの成績評価が、評価指標となっている。

また、教育目標の達成状況の点検・評価、学習成果を測定するため、以下の調査を行っている。調査結果は、教職員に配付、公開、学内説明会を実施するなど、課題についての共有化を図るとともに改善の努力をしている。

・「授業に関する学生の声アンケート」毎年実施

各授業の実施状況や満足度などを測定している。

・「在学生調査」2002、2004、2005、2006、2010 年度実施（2002 年度は 2･3 年次生）

教育・進路支援等に関する満足度を測るため全 4 年次生を対象に実施している。調査項目には、身につけたい事柄と実現度、進路満足度、授業の就職活動への役立ち度、自主学習のための施設利用経験と満足度、課外活動経験と満足度、本学への総合満足度などがある。

・「卒業生調査」2008 年度実施

芸術学部 2005 年度・2006 年度卒業生を対象に実施している。調査項目には、大学の総合満足度、教員や授業への満足度に関する設問がある。

≪大学院≫

学習成果の測定は、修士課程は修士作品・論文、博士後期課程は博士論文に対する最終的な成果、指導に対する達成度、研究活動の取り組みが評価指標となっている。

教育目標の達成状況の点検・評価、学習成果の測定するための調査は、「授業に関する学生の声アンケート」は関連演習科目と共通理論科目のみ、「在学生調査」「卒業生調査」は行っていない。

**○学生の自己評価、卒業後の評価（就職先の評価、卒業生評価）**

≪芸術学部≫

2011 年 5 月「在学生調査」によると、総合的な満足度は 76%である。授業の満足度は、専門科目が 82.4%、共通専門科目が 81.5%、総合選択実技科目が 77.2%、教養科目が 70.0%であり、教養科目が比較的低くなっている。

「入学前に身につけたいと思っていた事柄と、その実現度」に関しては、入学時に「芸術分野の知識・技術」「創造力」を身につけたいと思っていた学生の割合（期待度）はそれぞれ 92.6%、76.1%と高く、実現度（身につけたいと思った学生のうち、実際に身についた学生）もそれぞれ 86.4%、84.2%と高い。逆に「幅広い知識や教養」の項目が、期待度・実現度ともにもっとも低く、期待度は 59.6%、実現度は 66.7%である。

2008 年 8 月「卒業生調査」によると、本学を卒業したことに対して「満足している」と答えた卒業生は 92.8%であった。専門科目満足度の全体平均は 85%である。工芸学科・芸術学科が 100%、日本画専攻が 95.2%と高く、中には 69.0%と低い専攻もあり、学科・専攻ごとにばらつきがある。

専門科目に関しては、「卒業後もずっと心に残る授業がある」と答えた学生が 82.6%、「卒業後、その価値が分かる授業がある」と答えた学生が 76.3%と高い。

専門科目に関する要望は「より深く専門的に学べるようにして欲しかった」「もう少し自分の作品などを社会に発信できる機会が欲しかった」と答えた学生が多く、それぞれ 73.1%、68.6%だった。要望の上位は、学科ごとにやや異なり、洋画専攻、日本画専攻、立体アート学科では「もう少し自分の作品等を社会に発信できる機会が欲しかった」「実技室を広くして欲しかった」、工芸学科は「学生が施設を自由に使える環境を整えて欲しかった」「コンピュータの授業を増やして欲しかった」デザイン学科、芸術学科は「より深く専門的に学べるようにして欲しかった」、メディアアート学科、ファッション造形学科は「実技の基礎をもっと学びたかった」「社会で役立つ実践的な授業をして欲しかった」が他学科に比べて高い。

教養科目満足度は 64.7%と、専門科目より低い。「卒業後もずっと心に残る授業がある」と答えた学生は 65.2%、「卒業後、その価値が分かる授業がある」と応えた学生は 57.1%であった。

教養科目に関する要望は「興味や関心が持てる授業にしてほしかった」「社会で役立つ実践的

な授業をしてほしかった」が 69.6%で最も高い。洋画専攻、工芸学科では「コンピュータの授業を増やしてほしかった」、デザイン学科では「専門科目とつながる内容にしてほしかった」が他学科に比べて高い。

**（２）学位授与（卒業・修了認定）は適切に行われているか。**

**○学位授与基準、学位授与手続きの適切性**

**≪芸術学部≫**

明示している学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を基に、卒業制作・論文の最終的な成果とそこに至るまでの指導に対する達成度と取組みに基づき、総合的に一定の成果を修めたかを評価指標として判定し、「卒業制作」「卒業研究」の単位を付与している。

卒業所要 124 単位の修得により、教授会にて卒業判定の審議を行い、最終的には学長が学位を授与している。

**≪大学院≫**

明示している学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を基に、修士課程は修士作品・論文、博士後期課程は博士論文に対する最終的な成果、指導に対する達成度、研究活動の取り組みを評価指標として判定している。

学位の授与の手続きについては、履修の手引に女子美術大学学位規程、修士課程研究指導及び学位審査要綱、博士後期課程学位審査要綱を記載している。博士後期課程の学位申請に当たっては、研究領域「芸術文化」についてはあらかじめ 3 点以上、研究領域「美術」及び「デザイン」については 1 点以上の公表された査読付き論文（公表予定を含む）があることを条件としている。

**○学位審査および修了認定の客観性・厳格性を確保する方策**

**≪大学院≫**

修士論文または作品、博士論文（以下「学位論文等」）の審査を行う際は、学位論文等ごとに研究科委員会の教員 3 名以上の審査委員を選定している（博士後期課程は研究領域「美術」及び「デザイン」においては審査委員に研究領域「芸術文化」から副査 1 名を選定する）。また、学位論文等審査のために必要がある時には、3 名の審査委員の中に本学以外の大学院又は研究所の教員等を加えることができるものとしており、客観性を担保している。

博士論文の審査は、まず審査委員会により査読、口頭試問、研究作品の発表を経て最終審査が行われる。最終審査の合格内示後は、博士論文は公開の口頭発表と縦覧が行われ、研究科委員会に学位授与要件の有無の認定について審議の上、合格又は不合格を決定している。

**２．点検・評価**

**（１）効果が上がっている事項**

**≪芸術学部≫**

①「在学生調査」において、授業の満足度は 2006 年度に比べて全ての科目で上昇している。

②「卒業生調査」において、本学を卒業したことに対して「満足している」と答えた卒業生

は 92.8%であり、2003 年度の 86.6%に比べて上昇している。

（２）改善すべき事項

≪芸術学部≫

①全学的かつ包括的な進路支援体制の構築が必要である。

②「基礎学習ゼミ」やキャリア関連科目の有機的連携及び整備の必要がある。

③「在学生調査」「卒業生調査」ともに、教養科目の満足度が「専門科目」に比して比較的低い。

④「卒業生調査」の専門科目の満足度が、学科･専攻ごとにばらつきがある。

≪大学院≫

大学院生へは、各領域に在籍する学生が少数のため個人の特定を防ぎ、「授業に関する学生の声アンケート」は関連演習科目と共通理論科目について調査しており、「在学生調査」「卒業生調査」は行っていない。

３．将来に向けた発展方策

（１）効果が上がっている事項

≪芸術学部≫

今後も「在学生調査」「卒業生調査」などの満足度調査を行い、より一層の教育・支援サービスの向上や改善活動を実施していく。

（２）改善すべき事項

≪芸術学部≫

①卒業生の受賞、起業、アーティスト・クリエイターの動向を把握するよう努める。

②在学生の受賞の状況を把握するよう努める。

③学習成果を測る評価指標の開発を行う。

④懇談会などを通じて、更なる教員とキャリア支援センターとの相互協力・連携による全学的かつ包括的な進路・就職支援体制の構築を目指す。

⑤早期からのキャリア教育として、付属中学・高校との連携や、ＵターンやＩターンのための地方企業の新規開拓の一環として、日本全国にある同窓会支部及び同窓生との連携による情報収集など、更なる側面支援を充実させる。

⑥「基礎学習ゼミ」にソーシャルスキルなど、将来の進路・就職に繋がるプログラムの増強を行うことによって、学生個々の早期からの能力向上を目指す。

⑦選択科目「キャリア形成 A～D」の授業内容を、キャリア支援センターでの支援内容と相互連携することにより、正課・正課外の両面から、進路・就職サポートを行う。

⑧「在学生調査」に学習成果測定を目的とした設問の追加による教育成果・効果測定が必要である。アンケート結果は、非常勤講師等への周知も行う。

⑨教育課程・支援体制を検証する目的で、新入生を対象とした「入学生調査」を実施し、「在学生調査」との数値変化を目的とした項目を用意するなど、学生の変化や教育成果を測定するための検討が必要である。

⑩「授業に関する学生の声アンケート」の実施内容についても見直す。

# Ⅱ．学生の受け入れ

## １．現状の説明

### （１）学生の受け入れ方針を明示しているか。

**〇求める学生像の明示**

**≪大学全体≫**

アドミッションポリシー（求める学生像）は、芸術学部・大学院ともにホームページ、『入学試験要項』に掲載、周知している。

**≪芸術学部≫**

芸術学部の教育理念として、①「時代を超えて美を追求する個性豊かな専門家を育成する」、②「芸術との感動的出会いの積み重ねを通して、創造の喜びを培い、広い視野と柔軟な思考・行動能力の獲得をはかる」、③「社会を読む眼を育て、時代の流れを先取りする芸術的感性を養う」を掲げ、この理念と教育目標の実現のために、2008 年度入試より入学者受け入れ方針として以下のとおり「芸術学部の求める学生像」を明文化し、入学試験要項、ホームページ、『入試ガイド・問題集』に掲載し周知している。

芸術学部　アドミッションポリシー（求める学生像）

| |
|---|
| 美術・デザインに深い興味を持ち、専門家としてそれぞれの分野で活躍することを目指す人、芸術によって社会に貢献し自立したいという意欲ある人材を求めます。<br>求める資質・能力としては、芸術に対し自由で柔軟な考え方を持っていること、対象をよく観察し理解する眼を持っていること、問題意識を持ち自ら考える姿勢を持っていること、個性を素直にのびのびと表現できることが挙げられます。 |

**≪大学院≫**

美術研究科博士後期課程の教育理念としては、①「作品制作と理論との融合による新たな制作者・教育者の養成」、②「社会で指導的役割を果たす高度な専門知識と技術を持つ人材の養成」、③「幅広く、堅実な方法論を持つ造形理論研究者の養成」とし、同修士課程の教育理念としては、①「芸術の新しい動向に対応し得る、確かな原理を体得した専門家・作家・研究者の養成」、②「芸術研究の新分野の開拓」、③「新しい視点からの創作研究」を掲げている。これについても芸術学部同様、理念の実現のため、以下のとおり「求める学生像」を明文化して周知している。

大学院美術研究科　アドミッションポリシー（求める学生像）

| |
|---|
| 芸術に対する深く幅広い学識と技術を持ち、高度な専門家としてそれぞれの分野で活躍することを目指す人、社会に貢献する作家・研究者・教育者として自立したいという意欲ある人材を求めます。<br>求める資質・能力としては、「幅広い視野と芸術的発想力を持つ人」「問題意識を持ち、課題に対して柔軟に積極的に取り組む人」「豊かな表現力を持つとともに知識への深い探究心を備える人」が挙げられます。 |

**○当該課程に入学するにあたり、習得しておくべき知識等の内容・水準の明示**

**≪芸術学部≫**

高等学校においては「美術」が必修科目となっておらず、高等学校によっては選択肢の無い場合もある。しかし、そうした環境にありながら意欲・素質共に備えた本学の求める人材がいるケースも少なくない。こうした現状から、求める人材が高等学校段階において習得しておくべき知識等を「科目」として明示することはできないのが現状である。その水準やポイントについては、『入試ガイド・問題集』を作成・配付し、専門試験の参考作品の写真や、「出題意図」「採点ポイント」などを掲載するなどして内容や水準の周知を図るとともに、オープンキャンパス・進学説明会等で参考作品の展示のほか、作品を持参した受験生には個別に作品の講評などを行っている。

**≪大学院≫**

美術研究科では、専攻・領域ごとに異なるが、入試においてその水準を測っている。また評価基準は明文化していないが、事前に個別相談を受け、希望する研究テーマや研究計画についての個別相談を受けるなどして対応している。

**○障がいのある学生の受け入れ方針**

**≪大学全体≫**

受験生が疾病（障がいを含む）などにより入学試験や入学後の授業において、特別な配慮を希望する場合は、入学試験要項に診断書の提出とともに具体的に希望する配慮の内容について事前相談を受け付けていることを記載している。

本学は、作品制作の作業が中心となる分野が多いため、これまで重度の四肢障害や、全盲の学生で入学を希望したケースは無かった。例年、軽度の身体障害や聴覚障害などのある希望者はいるが、個別に本人の希望する配慮の内容を確認し、対応している。受験時の座席指定や指示内容の文章化、手話通訳の配置、別室受験など、必要とされる配慮を実施した上で試験を実施し、採点においては他の受験生と同様の扱いで行い、合否判定を行っている。

**（２）学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適正に学生募集および入学者選抜を行っているか**

**○学生募集方法の適切性**

**≪大学全体≫**

学生募集方法としては、次のような広報活動を実施している。

広報計画は、理事会の下に設置している広報委員会において年度ごとの広報計画を策定し、総務企画部広報課がそれをもとに広報媒体の発行・配布、インターネットによる情報発信、雑誌・新聞などへの広告掲載、およびオープンキャンパスや学外説明会の実施などの広報活動を行っている。

また、教職員による高校訪問や教員による高校での授業なども実施し、本学の理念や特色、教育目標、教育課程、入試制度などを広く周知し、本学への理解がより深まるよう努めている。

広報委員会の委員は、2011 年度よりその機動力をさらに向上させるため、規定を一部改正し、①理事の内から理事長が指名する理事１名、②広報担当部長、③法人本部長、④大学教務部長、短期大学教務部長、⑤総務企画部長、⑥広報課長、⑦付属高等学校・中学校教諭より校長が指名する者 1 名、⑧その他理事長が必要と認めた者若干名で構成することとした。委員長は①の理事があたり、副委員長は②広報担当部長があたる。審議事項は、①大学広報に関する方針の策定、法人の広報全般に関わる調整に関する事項、②入学者募集広報に関する事項、③その他広報の推進に関する事項である。

大学案内については、これまでの日本語版、英語版をさらに充実させ、アジアからの留学生を念頭に置いて中国語、台湾語、韓国語の 3 種類の言語を加え、計 4 種の言語で作成した。
また、入試情報を掲載した冊子も、同様に日本語以外に 4 種類の言語で作成している。
その他、学内情報の発信媒体として、在学生、保護者、入学希望者向けに広報誌「女子美」を発行している。さらに、卒業後の就職先である企業に、本学卒業後の状況進路状況を伝えることを目的として『Joshibees』を刊行し、これについては在学生の進路検討資料としても活用するほか、入学希望者に対しては卒業後の進路を視野に入れた大学選びを行うための資料として配布している。

受験希望者への情報提供を目的として配付する資料としては、前述の入試ガイド・入試問題集をはじめ、学科・専攻別のパンフレット、保護者向けの情報誌なども作成した。
進学説明会については、高校教諭、予備校講師などを対象とした「教員対象進学懇談会」をはじめ両校地で開催するオープンキャンパスや説明会を 5 月・6 月・7 月・9 月・10 月に実施するほか、個別の見学希望者に対しては職員の進学アドバイザーを配し、年間を通して随時対応している。また、学外での会場説明会への参加や、高等学校・予備校での説明会実施も積極的に行い、中国・台湾・韓国での説明会も実施している。さらに、高等学校での出張授業にも力を入れ、授業内容と担当教授を紹介した冊子を配布して希望を募り、授業に支障の無い範囲で教員を派遣している。

**○入学者選抜方法の適切性**

**≪大学全体≫**

入学者選抜方法については教務委員会で入学試験要項案を審議し、教授会の議を経て決定しており、全ての入試はここで決定した「入学試験要項」に基づき実施している。

また、入学試験を公正かつ円滑に実施するため、入学試験運営委員会（芸術学部構成員：芸術学部長、法人本部長、教務部長、学生部長、教授会において互選された学科目担当者 1 名および実技科目担当者 3 名　大学院構成員：美術研究科長、法人本部長、教務部長、研究科委員

会において互選された委員３名）を設置し、各入学試験にあたっている。

各種入学試験問題は、各試験科目の出題委員が作成したものを、入学試験運営委員会および事務所管の入試課が受け取り、厳重な機密保持のもと印刷・封入にあたっている。

また、合否判定に関する資料については、入学試験運営委員会のもとで入試課が作成している。合否を厳正かつ慎重に進めるため、先ず入学試験運営委員会委員に各学科・専攻主任を加えた合否判定予備会議を開催し、原案を検討した後、教授会において予備会議での判定経過を報告し合否判定を最終決定している。

**≪芸術学部≫**

芸術学部の入学者選抜方法については、1990 年代より多様化を図ってきている。

1991 年度より「一般入学試験」、推薦入試である「付属推薦入学試験」および「指定校制推薦入学試験」に加え、帰国子女を対象とした「特別選抜入学試験」を開始。その後「特別選抜入学試験」は 1998 年度より社会人を対象に含め、1999 年度からは外国人留学生も対象に加えており、2002 年度からは「公募制推薦入学試験」を導入している。「一般入学試験」は 2003 年度よりＡ日程、Ｂ日程の 2 回に分け、受験の機会を増やしている。さらに、2008 年度入試より、学生の資質、意欲、オリジナリティ、成長の可能性を観る「ＡＯ入試」を実施。初年度は立体アート学科、メディアアート学科、ファッション造形学科、芸術学科において導入し、翌 2009 年度には工芸学科が加わった。2010 年度からは新学科組織での募集となり、美術学科では立体アート専攻、芸術表象専攻、デザイン・工芸学科ではプロダクトデザイン専攻、工芸専攻、アート・デザイン表現学科では４領域全てで実施。2011 年度には美術学科の洋画専攻、日本画専攻、デザイン・工芸学科の環境デザイン専攻が加わり、ヴィジュアルデザイン専攻を除く全ての専攻・領域で実施することとなった。

また、2012 年度からは第 2 期を設定し、定員が充足しない場合は 2 回目を実施することとした。なお、2012 年度には新設の美術学科美術教育専攻でも実施している。

このほか、2013 年度入試より大学入試センター試験を利用した入学試験の実施に向けて現在準備を進めている。

3 年次においての編入学試験としては、「一般入学試験」のほか、「女子美術大学短期大学部からの推薦入学」や「指定校制推薦入学試験」を実施している。編入学試験の募集人員は併設の短期大学部が定員を減員したことにより 2012 年度入試より 68 名から 40 名に変更した。

こうした多様な選抜方法については、先に述べたアドミッションポリシー（求める学生像）をもとに選抜方法ごとの「入学者選抜方針」を定め、明文化して 2008 年度入試より各入学試験要項やホームページに明示し入学希望者に周知するとともに、各選抜方法における試験科目についても検証し、改善を進めて現在の多様な方法を備えるに至っている。

**芸術学部 入学者選抜方針と選考方法一覧(2012 年度入試)**

| 入試制度 | | 選抜方針 | 選考方法 |
|---|---|---|---|
| 一般入試 | A日程 | 「基礎学力」と「学科・専攻・領域の求める専門的基礎技能」がともにバランスのとれた、総合的に優秀な方を選抜します。 | 学力試験(国語・英語)<br>専門試験(実技) |
| | B日程 | 優秀な専門技能を有し、各学科の適性を兼ね備えた方を求めます。 | 専門試験(実技)<br>面接 |
| AO入試 | | AO入学試験では、大学は教育目標、育てたい人物像、カリキュラム、授業の進め方等を示し、受験生は自らの目標や資質、大学で学びたいこと等を示すことでお互いの理解を深め、学業のみならず、その他の<br>活動や能力及び意欲を、書類あるいは本人の成果物と面談により、総合的・多面的に評価し、入学許可者を決定します。<br>単に表現力の優劣だけを問うものではなく、本人の資質、意欲、オリジナリティ、成長の可能性を観るもので、これまでの入学試験では見極めることが難しかった多種多様な個性を持つ人材を受入れることを目的として実施します。 | 提出書類<br>作品持参による面談<br>課題提出<br>ワークショップ、グループディスカッションへの参加など |
| 特別選抜入試 | 社会人 | 社会経験を持つ方を積極的に受入れることにより、多様な価値観に触れ、学生相互が広い視野と柔軟な思考を獲得するとともに、活気ある教育環境を創り出すことを目的に実施します。 | 専門試験(実技)<br>面接<br>提出書類 |
| | 帰国子女 | 外国において教育を受けた方を積極的に受入れることにより、異文化や多様な価値観に触れ、学生相互が広い視野と柔軟な思考を獲得するとともに、活気ある教育環境を創り出すことを目的に実施します。 | 専門試験(実技)<br>面接<br>提出書類 |
| | 外国人留学生 | 留学生を積極的に受入れることにより、異文化や多様な価値観に触れ、学生相互が広い視野と柔軟な思考を獲得するとともに、活気ある教育環境を創り出すことを目的に実施します。 | 専門試験(実技)<br>面接<br>提出書類 |
| 付属推薦入試 | | 志望学科・専攻の技能・適性等を付属高校長が責任を持って推薦する学生を信頼関係により受け入れる。 | 高等学校における総合成績と実技成績 |
| 指定校制推薦入試 | | 美術に深い興味と優れた資質を持ち、意欲・勤勉度が高く着実で将来性があり、志望学科・専攻・領域の技能・適性等について出身学校長が責任を持って推薦する方を対象とします。 | 面接<br>提出書類 |
| 公募制推薦入試 | | 「学科・専攻・領域の求める専門的基礎技能」と「意欲・目的意識」に力点を置いた選抜方法で、各学科とも専門試験、面接および提出書類により総合的に判定します。美術・デザイン等に深い興味を持ち、本学への入学を強く希望する方を対象とします。 | 専門試験(実技)<br>面接<br>提出書類 |

**≪大学院≫**

美術研究科においても同様に、アドミッションポリシー（求める学生像）をもとに「入学者選抜方針」を定め、明文化して入学試験要項やホームページに明示し、入学希望者に周知している。

修士課程では、例年、1 月中旬に「一般入試」と「外国人留学生特別選抜入試」の 2 種類の

入学試験を実施している。選抜方法は、一般入試においては、学力検査（外国語または小論文）、提出作品（資料を含む）または論文、研究計画書、面接、および出身大学の成績証明書を総合して判定する方法を採用している。外国人留学生特別選抜入試においては、日本語による小論文、提出作品（資料を含む）、研究計画書、面接、最終学校の成績証明書および日本語能力を総合して判定することとしている。これらの入学試験において入学定員に欠員が生じた場合は 3 月上旬に 2 次募集を行い、一般入試のみを実施する。

博士後期課程では、例年、3 月上旬に入試を実施している。選抜方法は、外国語試験（英語）、研究分野に関する口述試験、提出物、研究計画書、および出身大学院の成績証明書を総合して判定する方法を採用している。

上記のほかに、非正規学生（「研究生」および「科目等履修生」）として入学を希望する者がある場合は、別途選考の上、入学を許可している。

**○入学者選抜において透明性を確保するための措置の適切性**

**≪芸術学部≫**

各試験の評価基準は、2009 年度より入学試験要項に明文化し、受験生に対して周知している。入試要項作成にあたり、この評価基準を毎年度各研究室において確認・再検討することにより、多様な入試制度であっても、各入試において複数の採点担当者が共通の評価基準で評価を行うことができるようにしている。特に面談が中心となるＡＯ入試では、学力試験の解答用紙・専門試験の作品といった客観的な評価対象物が無いため、評価基準を基に審査記録用紙を作成し、担当者全員がこの審査記録に記載された評価基準に則って評価を行っている。

また、本学が発行する『入試ガイド・問題集』では、入試制度ごとの学力試験問題および解答例、実技試験参考作品および「出題の意図や採点のポイント」を明文化し、公開している。そのほか、オープンキャンパスや学外の進学相談会などの各種説明会では、前年度の合格参考作品の展示や、受験生の持参作品に対して選抜基準に従った講評などを行っている。

さらに、ホームページで前年度の入試結果を公開するとともに、一般入学試験Ａ日程においては、本人から請求があった場合に個人の成績を開示している。

**≪大学院≫**

大学院の入試においては評価基準の明文化はしていない。また、問題集は作成しておらず、受験生に対しては過去の試験問題をコピーして配布し、入試結果についてはホームページで公開している。

**（３）適切な定員を設定し、学生を受け入れるとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。**

**○収容定員に対する在籍学生数比率の適切性**

2011 年 5 月 1 日現在の入学定員、収容定員、在籍者数、定員超過率は、下表のとおりである。

≪芸術学部≫

在籍者数　１・２年次　　2011 年 5 月 1 日現在

| 学科 | 専攻・領域 | 入学定員 | 収容定員 | １年次 | ２年次 | 合計 | 定員超過倍率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 美術学科 | 洋画 | 200 | 400 | 128 | 128 | 256 | 1.13 |
| | 日本画 | | | 54 | 52 | 106 | |
| | 立体アート | | | 34 | 26 | 60 | |
| | 芸術表象 | | | 15 | 15 | 30 | |
| | 計 | | | 231 | 221 | 452 | |
| ﾃﾞｻﾞｲﾝ･工芸学科 | ｳﾞｨｼﾞｭｱﾙﾃﾞｻﾞｲﾝ | 230 | 460 | 153 | 141 | 294 | 1.15 |
| | ﾌﾟﾛﾀﾞｸﾄﾃﾞｻﾞｲﾝ | | | 38 | 39 | 77 | |
| | 環境デザイン | | | 22 | 22 | 44 | |
| | 工芸 | | | 55 | 59 | 114 | |
| | 計 | | | 268 | 261 | 529 | |
| ｱｰﾄ･ﾃﾞｻﾞｲﾝ表現学科 | メディア表現 | 160 | 320 | 88 | 83 | 171 | 1.17 |
| | ヒーリング表現 | | | 35 | 34 | 69 | |
| | ﾌｧｯｼｮﾝﾃｷｽﾀｲﾙ表現 | | | 43 | 43 | 86 | |
| | ｱｰﾄﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｽ表現 | | | 26 | 24 | 50 | |
| | 計 | | | 192 | 184 | 376 | |
| 芸術学部　１・２年次　合計 | | 590 | 1,180 | 691 | 666 | 1,357 | 1.15 |

在籍者数　３・４年次　　2011 年 5 月 1 日現在

| 学科 | 専攻 | 収容定員 | ３年次 | ４年次 | 合計 | 定員超過倍率 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 絵画学科 | 洋画専攻 | 288 | 125 | 124 | 249 | 1.19 |
| | 日本画専攻 | | 49 | 47 | 96 | |
| | 計 | | 174 | 171 | 345 | |
| 工芸学科 | | 110 | 60 | 64 | 124 | 1.12 |
| 立体アート学科 | | 70 | 41 | 42 | 83 | 1.18 |
| デザイン学科 | | 330 | 191 | 191 | 382 | 1.15 |
| メディアアート学科 | | 220 | 122 | 139 | 261 | 1.18 |
| ファッション造形学科 | | 110 | 55 | 70 | 125 | 1.13 |
| 芸術学科 | | 90 | 37 | 53 | 90 | 1.00 |
| 芸術学部　３・４年次　合計 | | 1,218 | 680 | 730 | 1,410 | 1.15 |

在籍者数　芸術学部合計　　2011 年 5 月 1 日現在

| | 入学定員 | 収容定員 | 1･2 年次 | 3･4 年次 | 合計 | 定員超過倍率 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| １・２年次 | 590 | 1,180 | 1,357 | — | 1,357 | 1.15 |
| ３・４年次 | — | 1,218 | — | 1,410 | 1,410 | 1.15 |
| 芸術学部　合計 | 590 | 2,398 | 1,357 | 1,410 | 2,767 | 1.15 |

芸術学部全体の定員超過率は、1.2 倍を限度として、入試制度ごとに過去の実績および志願者数予測等を基に想定数を定め、合格者数決定の参考としている。結果、上記のとおり、専攻･領域により差はあるものの、学科としては 1.2 倍を超えていない。

注）2010 年度より芸術学部においては学科組織を変更しており、1･2 年次と 3･4 年次では定

員数が異なる。

2 年次以降は退学者数を考慮して、芸術学部においては３年次編入学試験を実施し、収容定員の調整を行っている。

≪大学院≫

**修士課程**　　2011 年 5 月 1 日現在

| 専攻 | 研究領域 | | 入学定員 | 収容定員 | １年次 | ２年次 | 合計 | 定員超過倍率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 美術専攻 | 洋画 | | 35 | 70 | 10 | 14 | 24 | |
| | 日本画 | | | | 6 | 4 | 10 | |
| | 版画 | | | | 6 | 4 | 10 | |
| | 工芸 | 染 | | | 3 | | 2 | |
| | | 織 | | | 1 | 2 | 1 | |
| | | 陶 | | | 1 | 2 | 1 | |
| | | ガラス | | | 1 | 2 | 1 | |
| | | 刺繍 | | | 1 | 2 | 1 | |
| | 立体芸術 | | | | 7 | 7 | 14 | |
| デザイン専攻 | ヒーリング造形 | | 15 | 30 | 7 | 4 | 11 | |
| | ﾒﾃﾞｨｱｱｰﾄ造形 | | | | 8 | 8 | 16 | |
| | ファッション造形 | | | | 2 | 1 | 3 | |
| | 視覚造形 | | | | 3 | 4 | 7 | |
| | 環境造形 | | | | 3 | 4 | 7 | |
| 芸術文化専攻 | 色彩学 | | 7 | 14 | 1 | 5 | 6 | |
| | 美術史 | | | | 1 | 1 | 2 | |
| | 芸術表象 | | | | 1 | 2 | 3 | |
| | 美術教育 | | | | 3 | — | — | |
| 修士課程　合計 | | | 57 | 114 | 63 | 64 | 127 | 1.11 |

**博士後期課程**　　2011 年 5 月 1 日現在

| 専攻 | 研究領域 | 入学定員 | 収容定員 | １年次 | ２年次 | ３年次 | 合計 | 定員超過倍率 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 美術専攻 | 美術 | 3 | 9 | 2 | 1 | 1 | 4 | |
| | デザイン | | | 0 | 1 | 1 | 2 | |
| | 芸術文化 | | | 0 | 1 | 1 | 2 | |
| 博士後期課程合計 | | 3 | 9 | 2 | 3 | 3 | 8 | 0.88 |

**（４）学生募集および入学者選抜は、学生の受け入れ方針に基づき、公正かつ適切に実施されているかについて、定期的に検証を行っているか。**

≪芸術学部≫

先に述べたとおり、入試要項作成にあたり、毎年度選抜方針と評価基準について教務委員会において検討を行っている。

また、決定した要項に基づき各入試を実施するにあたっては、試験毎に入学試験運営委員会において実施要項を作成し、判定方法を明記することで再度確認している。

また、合否判定においては、判定予備会議において入学試験運営委員会の下で各判定方法に

則った資料を作成し、公正に判定を行っている。

各入試の採点については、入試ごとに採点委員を定め、複数教員による採点を実施し、答案用紙、専門試験作品には受験番号のみを表記し、個人名を伏せた状態で実施することで公平性を保持している。

## ２．点検・評価

### （１）効果が上がっている事項

**≪芸術学部≫**

多様な資質を持った学生を確保するために、選考基準の異なる試験を複数回実施することにより、受験の機会を増やしている。

また、入学試験の方式が多様化する中、選考する側にとっても、各方式の選抜方針を明文化することで、判定基準が整理され、定められた基準に照らして各入試での判定を実施できている。

### （２）改善すべき事項

**≪大学院≫**

美術研究科について評価基準の明示がなされていない。ホームページやシラバスにおいてはアドミッションポリシーを明示しているが、大学案内の中では明示されていない。

## ３．将来に向けた発展方策

### （１）効果が上がっている事項

**≪芸術学部≫**

評価基準の文面をより簡潔でわかり易い文章とするよう努め、求める学生像に即した文章となるよう引き続き検証を行なう。

### （２）改善すべき事項

**≪大学全体≫**

大学案内においてアドミッションポリシーを明示する。

**≪芸術学部≫**

①入学にあたり、習得しておくべき知識等の内容・水準の明示は、教務委員会で明示の可能性について検討をしていく。

②専攻・領域ごとの定員倍率の差に対応し、学生を確保するための方策を検討していく。

**≪大学院≫**

美術研究科における評価基準を、研究領域ごとにどう表現するかを大学院運営委員会で検討し、明文化する。